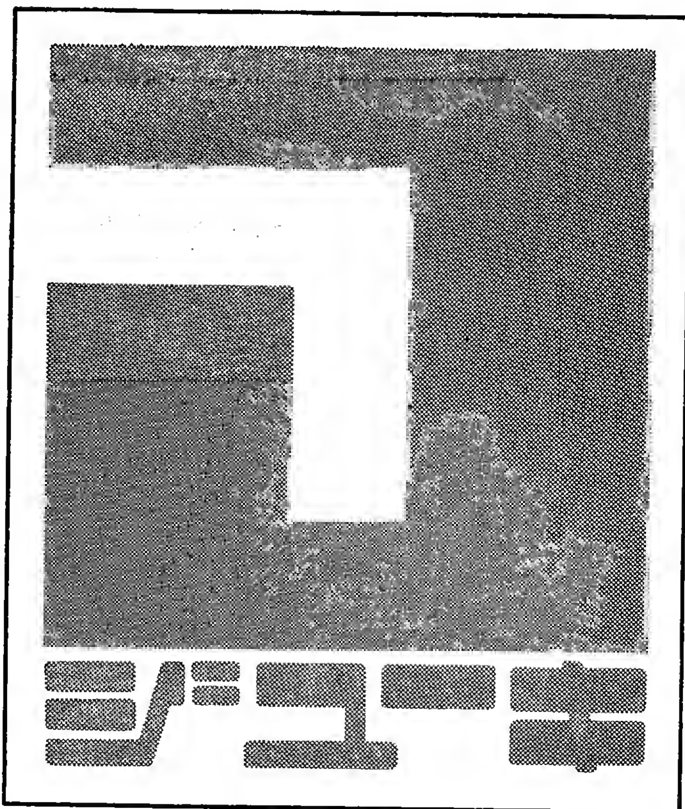
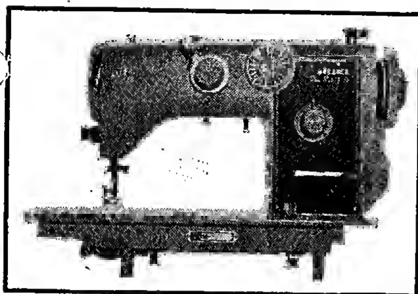
ミシンはマークで
お選び下さい





*HZD−956*型
ダイカスト・フルオートジグザグ

東京重機工業株式会社

本社工場 東京都調布市国領町８丁目２番地ノ１電話（480）1111番（大代表）

ハンドボール「第52号目次」

昭和43年4月号

表紙写真　第1次合宿に集った日本女子ナショナルチーム…田村正衛選手団長撮影

時　評

ラフプレーに負けない気力と技術を

最近、来日した、ニュージーランドのラクビーチーム「ポンソンビー」の試合ぶりについて、色々ととりざたされている。

いろいろな見方があるようである。曰く、あくことなき勝利への意欲から出る必然的なものでありやむを得ないであろう。現在の日本選手には、このあくことなき勝利への斗志が欠けているから、見ならうべきである。曰く、スポーツにはルールと云うものがありレフエリーに見つからなければ何をやってもいいというのではもはや試合ではない等々……

ハンドボールでも、こういった事は良くあるようである。特にヨーロッパ諸国間の試合に於いてはしばしばあるように聞いている。

先年は審判をよってたかって、うちすえた事件とか、最近では、ドイツ国内リーグで、VfL・グンメルスバッハのGKポダクがBSVゾーリンゲン98との試合で、相手選手につかみかかり、足げにしたとかいう不祥事が紙面に掲載され、識者の非難を浴びている。

IHFの技術委員会でも、この点に鑑み、国際審判員講習会のたびに、審判は断固たる態度で臨めという一項を必ずつけ、審判員に試合が荒くならないように注意をうながしている。

国内試合でも、大きな試合になると、しばしばこのような事態は起っている。国内的にみれば、このような風潮はしだいに改められているということが云えよう。

しかし、世界の舞台は必ずしもそうではないようである。ヨーロッパ・カップにおいても、しばしばホームチームが勝つ場合が見られる。これは単純に、地元の利とばかり考えられない面が多い。観衆を含めた勝利へのあくなき戦いが展開されるというのが真相のようである。

世界の桧舞台はこういった面に於いても、非常に厳しいものをもっている。これからさき、日本も多くの試合をし、勝たねばならない試合も多い。この時に、相手はあくなき勝利への斗志むきだしのプレーをしてくることがしばしばあろう。勝つためにはどんなことでもというプレーにも直面することになろう。いくら相手がきたないプレーをしてきても、それをふりきるだけの気力と技術・戦術を身につけておかなければならない。

ヨーロッパ諸国のプレーヤーの執念と斗志は非常なるものであることを肝にめいじ、あくまでもきれいなプレーを身上にしつつ、充分な気力をもって国際試合、国内試合とも勝って欲しいものだ。(TS、F)

〝選手強化、機構改革に着手〟

～一九六八年度の開幕にあたって～

荒川理事長と一問一答

30年の年輪を経た日本ハンドボール界が、4年後に待ちうけるオリンピックという大目標に向かつて意気高らかに船出した。
一九六八年度のシーズン開幕に際して、本誌編集部では荒川清美日本協会理事長と当面する問題について一問一答を行った。
荒川理事長の回答の中には、すでに実行への承認をうけたものもあれば、はじめて語られる〝構想〟もある……。

—まず一九六七年度をふりかえって欲しいのですが

理事長　「日独対抗」と「30周年記念行事」の二つが大きな仕事だったと思う。

多くの問題をかかえて前の執行部からバトン・タッチされたわれわれにとって「日独対抗」はいろいろな意味でよい経験になった。「30周年」それ自体は、年月の問題であってとりたててどうのということではないが、記念行事をひとつの〝機会〟にして球界の結束と意気を高めさせることができたのはよかった。

—日独対抗の成果をどのようにみられていますか

理事長　来日チームのコンディションが必しも良いとはいえなかったので、ヨーロッパと日本の技術の尺度を計るという点では物足りなさもあり、招待時期など今後に研究課題を残したが、日本チームあるいは選手が出来ないものを彼らは備えていたことで充分それをカバーし得たといってよい。

特に、GKのテクニック（注・来日した男子のデュエル、女子のホィヤー両選手はヨーロッパでも屈指のGK）、チーム全体の行動やマナー、練習前のトレーニング法などをまのあたりにしたのは収穫であろう

—国内での国際試合で今後改善すべき点は？

理事長　来日チームが存分にその真価を発揮できるような日程の作成を考えていかねばならないだろう。

対戦チームにしても、これからはトップレベルの強化につながるようにして行きたい。

開催地の負担額が大きすぎるという声もあるが、ヨーロッパからの距離を考えれば仕方のないことだ。これを是正するには報道関係なり企業なり特定の後援者を見つける以外にない。

—国内問題で反省はありませんか。

理事長　世界選手権手続き遅延という大失態でも判る通り、日本協会の事務機構は弱い。一考も二考もしてこの欠陥をなくしたい。

また、各全日本選手権の開催時期、内容などについて再検討の必要があると思う。

いかにしたら、出場チームの力倆をフルに発揮をさせることができるかということを中心に、来年度には大きな改訂を行いたい。

主要大会が地方にいってしまっていることなども考えなくてはならない。

—その場合地方での普及ということが犠牲になると思うが。

理事長　オリンピックという大目標ができたので止むを得ないと私個人は思っている。もちろん、地方協会の声も聞くつもりだが…

—それでは新年度・一九六八年の抱負を聞かせて下さい。

理事長　まず第一に、機構改革を行いたい。すでに2月の全国評議員会席上その承認をうけているが、一口に云えば技術指導分野と事務分野をはっきり分けたい。事務局の重視が狙いだ。

—最大関心事であるオリンピック対策、世界選手権対策などトップレベルの強化は？

理事長　先にいったように全日本選手権を東京なり大阪なりに固定化して優秀選手を発掘するのも一つの方法だ。

また、地域単位に選抜チームをつくって試合を行い、だんだんにしぼって行くのもよいだろう。

国際試合の相手は単独チームよりも今後は、こうしたチームがつとめるように仕向けたい。

—機構改革と広範囲な選手強化が大方針のようですが具体的な実行には何時ごろ移しますか

理事長　機構改革は7月頃までに、トップレベル強化への対策は全日本総合（注・8月）ごろまでにはメドをつけたい。

—それによってスタッフの異動もするつもりですか

理事長　現執行陣がリーダーとなって、その下に積極的に若手を登用したい。今の常務理事は雑用に追われすぎ、本来の業務をじっくり進めることができない。

—ハンドボール界最大の課題である財源確保についてプランはありますか

理事長　行事による収入ということを真けんに考えたい。

それにはレベルの高い試合をすることが絶対必要だ。

そうすれば財源ばかりではなく強化にも、普及にも、さらには〝ハンドボールに親しむ誇り〟にもなる。

個人や企業からの〝恵み〟をアテにすることは間違いで、球界自身、協会自身が努力することが、この難題を解決する唯一無二の道だ。

—地方協会の財政難についてはお考えがありますが

理事長　苦労しているのはよく判るが、今いったようなことがそのままあてはまる。

国際試合を開いてその収入にたよるだけではなく、国内のトップチームを招いて有料試合をするのも一策ではないか。

——話の順が戻りますが、オリンピック対策の具体的な目標は？

理事長　グルノーブル冬季五輪の結果によって、今後日本のオリンピック選手団の編成は難しい問題がついてまわるだろう。

ミュンヘンでハンドボールが採りあげられるといって喜んでも、日本選手団が必ず行けるという確証は一つもない。

したがって、一九七〇年の第7回世界男子7人制選手権で6～8位入賞を絶対に成し遂げなければならない。

——〝世界〟をのぞむには、国際的視野がせまいという批判もあるが……

理事長　国際感覚を備えることは必要だが、自国の力がなくてはどうにもならない。国内の体制強化が先決だと思う。

——ところで底辺拡大も今のハンドボール界ではおろそかに出来ぬ大問題ですが対策はありますか

理事長　競技人口をふやすことと同時に〝支持人口〟をふやしていきたい。例えば、ハンドボールを経験した親が子を、兄が弟を試合場に連れていくといったような小さな単位でもよいのだ。いわゆる〝ファン〟をつくることが、競技人口を増やすことにもなる。選手をつくることばかりが底辺拡大ではないハズだ。

それと、今までやっていた者をはなさないようにすべきだ。

その意味でいわゆるOBの確保を各組織、各加盟団体と共同して研究して行きたい。

——クラブの重視についてはこれまでも何回となく云われて来たのですが、日本協会から具体的な対策が指示されたことはないように思うのですが

理事長　軽視していたわけではないのだが……。

今後は関東学生OBトーナメントとか、各県高校OB戦、クラブ対抗戦などといった企画をたてて実行に移してもらうよう関係者に要望したい。

本部協会としても機が熟せばクラブによる全国大会の開催を考える。

——国体に実業団の出場を認めないというのも、クラブ重視への一策になるのではありませんか

理事長　理想としてはそういうことがいえるが、所属県とのつながりも現状では無視できない。

その県の得点に、ハンドボールが大きな役割を果すことによってハンドボール普及の面でプラスを生むケースも多いのだ。

しかし、実業団の有力チーム辞退という問題は一応研究してみたい。

——普及面でこのほか考えていることはありますか

理事長　ハンドボールを安全教育の素材に出来ないか、ということを私自身、今研究している。ハンドボールの社会性の実証というような面だ。

それと、スポーツ少年団になんとか侵透させたい。組織的に推進させるのも結構だが夏休みに郷里へ帰った学生が、鎮守様の森に子供を集めてハンドボールを教えるといったような入りかたでも充分だと思う。

——最後に各組織、各加盟団体へ、理事長としての希望を述べて下さい。まず地方協会には何を望みますか

理事長　ともかく、ミュンヘンという大目標が出来、それに向かってまい進しようとする日本協会の意向を汲んで、例えば国際試合でも、これまでのように地元チームとの対戦よりも全日本なり、地域選抜なりの試合をプロモートする方向へ進んで欲しい。

——国際試合の予定は

理事長　来年、ソビエトの男女ナショナルチームを招きたいと思っている。今秋、全日本女子選手団が訪ソした際、具体的な交渉に入るつもりだ。

——高体連への希望は

理事長　難しい時期を迎えているとは思うが、指導者が、インター・ハイだけに力を注ぎすぎて、高校生のスポーツ活動というものの本質を忘れてしまわないように望みたい。

本部協会としても、なんとか高校プレイヤーたちに夢を抱かせるようなハンドボール界にしたいと思っている。韓国との交流などはその最たるものだろうし、再開へできる限りの努力をしたい。

——学連に対しては

理事長　学生よ、OBをはなすな。OBよ、ハンドボールからはなれるな、という二点だ。

そのためには、学生が精いっぱい努力してよい試合を見せる以外に方法はない。

学生選手が、グランド上のマナーはもとより学業でも、人格でもハンドボールを通じて恥じないような人間になることを目標としていることは論を待たない。

——実連に対しては

理事長　ハンドボールを職場のなかに入りこませる方法を考えてもらいたい。

例えば、昼休みの30分間、その会社のハンドボール部員が練習を公開したり、試合を見せたりといったことはできないものだろうか

——どうも長い時間いろいろとありがとうございました。一九六八年の大飛躍を期待しています

理事長　大きな目標に向かってベストをつくすつもりですので、いっそうの御支援をお願いします

（3月18日・日本ハンドボール協会室で）

新シーズンの有力チームを探る ①

女・子・実・業・団・の・巻

世界女子、世界男子そしてオリンピックへとつづく飛躍への道。
　晴れの舞台で主役となれるか端役（はやく）に終わるかは国内レベルの充実にかけられているといえよう。
　新シーズン開幕を前に、各分野の有力チームを2回に分けて探ってみよう。（杉山）

○……去年そして今年と球界の注目を一身に集めるのはトップチームが並んだ女子実業団である。全国4大タイトル独占という史上二度目の快挙をとげた田村紡（三重）の女王ぶり。西ドイツから5勝を奪ったレベルアップ。大会のたびにコートサイドをうならすトップチームの角逐……。今ほど日本の女子界が華やかな脚光をあびている時期はない。
　しかも、今年は各チームほとんどレギュラーに変動がない上、42年度高校優秀選手（本誌51号既報）の大半が実業団に加った。
　ますます激しい競りあいが予想されるのだ。

○……参考までに、いわゆる5強と呼ばれる各チームの去年の対戦成績を下段に掲げた。田村紡の無敵ぶりがいっそう判ろう。
　試合数は少いが、大洋デパート（熊本）が、田村紡以外に全勝しているのは注目してよい。大崎電気（埼玉）は得点力の低下がめだつ。三菱鉛筆（神奈川）は国内における女子国際試合の初勝利チームという輝やかしい記録を刻んだほか順調な伸びを見せたが安定度に乏しい。愛知紡（愛知）は、ついに対4強1勝という低調で1年をすごしてしまった。

田村紡は二班編成か

○……さて今シーズン各チームの補強ぶりを見ると、去年の成績に関連深い。
　つまり田村紡、大洋はほとんど不動の陣容。大崎、三菱、愛知紡は積極的に選手集めをしている。
　四冠王・田村紡から新陣容をのぞいてみることにしよう。
　世界選手権の団長を引きうけた田村社長は『今年はチームを二分し主力は全日本に専念させ、国内大会は若手中心でのぞむ。各大会の連続優勝などどうでもよい』という。新加入は、三毛（松阪女高）一人で、二本建ての構成は次のようになるだろう。

【A】渡辺美（GK）種村　小林　渡辺好　水谷　長谷川　清水（いずれも世界選手権代表）

【B】坂上（GK）甲村　吉開　三毛　渡辺信　若林　辻　久保田　広森

○……Aの7人についてはいまさら説明の要はあるまい。脚力、攻撃力、守備力、展開力すべてを備えた巧者だ。パワーという点では長谷川の成長が目立つ。GK渡辺美の好守は折紙つき。このスタッフで国内大会に出れば史上初の国体4連勝をはじめ国内大会での連続優勝を遂げることは難題ではないし2年連続四冠という偉業も夢ではない。
　しかし、なんといっても今年の興味は、彼女らを主力とした全日本女子のテクニックが〝世界〟でどこまで通用するかにかけられる。
　Bの中では、甲村、吉開、GK坂上らがレギュラー級の実力をもつが、この布陣で大洋以下と対等に戦うことは難しい。

スケール大きい大洋
大崎は攻撃力充実がカギ

○…2年間全国タイトルから遠ざかってしまった大洋デパートは2月地元で開いた全日本実業団ですっかり自信をつけたようだ。
　去年のメンバーから退いたのは今村と木原。ベテラン新保（世界選手権代表）を軸として垂水（世界選手権代表）渡辺、枝尾、射場、GK小原（世界選手権代表）らが健在、いずれも伸びざかりで、垂水、小原などは一試合ごとに上手くなるといわれるほどだ。今村の穴は米・島田、田中で埋めることになる。
　東海、関東とちがって練習相手にめぐまれぬハンディは大きいが攻撃スケールの大きさは田村紡に優るとも劣らず、あとはいかに勝運をつかむかだ。ホームエリア長崎での全日本総合を取れば、若さにモノを云わせて独走をとげる可能性は充分にある。
　新人は小林（熊本市高）と植原（阿村中）の2人。今後の戦力である。

○……大崎電気は攻撃力の復活が課題だ。早川、鈴木（ともに世界選手権代表）の力と技は相変らず他チームの脅威となっているが、後続が思ったより伸び悩んだのが去年の誤算である。

女子5強昭和42年度対戦成績表（本誌調べ）

	田村紡	大崎電気	大洋デパート	三菱鉛筆	愛知紡
田村紡（三重）	対4強 15勝1敗	○7—5 ○6—4 ○11—8	○11—10 ○9—3 ○9—8	○11—7 ○8—5 ○11—7 ○7—3	○20—10 ●10—18 ○17—7 ○8—4 ○17—8 ○8—6
大崎電気（埼玉）	●5—7 ●4—6 ●8—11	対4強 8勝6敗 1分	●5—11 ●6—7	○10—4 ○9—3 ●7—9 △5—5 ○6—5 ○11—2	○12—8 ○10—7 ○12—6 ○14—8
大洋デパート（熊本）	●10—11 ●3—9 ●8—9	○11—5 ○7—6	対4強 4勝3敗	○17—6	○21—6
三菱鉛筆（神奈川）	●7—11 ●5—8 ●7—11 ●3—7	●4—10 ●3—9 ○9—7 △5—5 ●5—6 ●2—11	●6—17	対4強 3勝9敗 1分	○13—5 ○15—8
愛知紡（愛知）	●10—20 ○18—10 ●7—17 ●4—8 ●8—17 ●6—8	●8—12 ●7—10 ●6—12 ●8—14	●6—21	●5—13 ●8—15	対4強 1勝12敗

ペースをつかんでも一気に相手をくだく力強さがカゲをひそめ、日独対抗では、いちどユニホームを脱いだ宇井、笠原らOGの手をかりねばならなかった。

シーズン後半から加藤（世界選手権代表）木幡に安定感が加って来たことと、逸材・三浦（花巻南高）日向野（栃木女高）の新加入は明るい材料だ。

このほか新島（深谷女）荒川（小山城南高）中野（新居浜商）寺尾（土居高）GK小堀（熊谷商工）と大量の新人が入社し小林、栗林、久保田、山崎、神藤らとともに激しいポジション争いになるのもチームの前進には役立つことだろう。GKは川崎、山田で無難。

有力新人集めた三菱

○……成長株・三菱鉛筆は昨冬の全日本選抜で期待通りの躍進（2位）を遂げたが、2月の全日本実業団では調子をすっかり崩してしまった。この〝もろさ〟をいかに克服するかが今シーズンのカギ。垂水（大洋）と並ぶ新進ゲッター蓮見（世界選手権代表）をエースに三井田、鈴木、落合、江川、両佐々木、地力を見せはじめた阿部を揃えた攻撃力はA級。GKも吉田、本庄で固い。

しかも今シーズンは、各チームすいぜんの的だった姫野（室蘭商）藤原（清水女高）小田島（花巻農）加藤厚(秋田和洋女高)北川（昭和学院）ら高校界の有力新人を加えて、さらにチーム力に厚味ができた。

中でも姫野は一七〇センチの長身で左腕。昨夏のインター・ハイで室蘭商を準優勝に導いた立役者だ。こうした新人の力が定評通りに発揮されれば、去年の実績を土台にして、宿願の全国優勝をチーム創立3年目に果すことができそうだ。

○……往年の愛知紡を知る者にとって、去年の低迷は〝淋しい〟の一語につきた。しかも、2月の全日本実業団から新繁樹氏が監督を退き、新シーズンを前にベテラン関口、小野、GK尾崎ら6人がやめた。再建への道はいっそうけわしい。小林、前田、五十嵐、GK山下と攻守の要が残っているので、一から出直しというわけではないが、皆川（水海道二高）、高山(小松市女高)、小島（京都精華高）、片松(香川三本松高)、GK井上（蒲郡高）ら新人の力も5強の座を守る大きなポイントになるだろう。

亀岡コーチは『すぐに最上位を狙うというのではなく、残った4人を軸として堅実に力を伸ばしたい。

小島・片松は身長（一七〇）もあり、その他の新人も好素質なのでカムバックの成算は充分ある』といっている。

5強を追う東京重機など

○……この5強を追って、その一角を崩そうと狙っているのは東京重機工業（東京）、2年目を迎えたブラザー工業（愛知）、新加盟の大洋紡（岐阜）である。

東京重機工業は、チーム創立6年目になるが、西ドイツ戦を行うなど意欲的な活動に比して、チーム力はもうひとつ物足らない。

しかし、今シーズンは飯田が抜けた以外は山本、滝口、島田、GK高野、川本らが健在のうえ、牧野、伊藤(以上秋田和洋女高)、才崎(山陽女高)、奥山（日川）、高坂（高松商）と5人の新人を加えた。

牧野は姫野（三菱）、三浦（大崎）とともに、去年の高校界の最優秀トリオという評判を得ていた選手。注目を集めよう。

その他の選手も母校のエース格。実戦的なタイプだけに、ベテランと新人の力がうまくかみあえば、全国大会のダークホースに躍進することができるだろう。

○……ブラザー工業も意気さかんだ。浅井、家田、近藤を中心に去年は手うすな陣容ながら精いっぱいの健斗を見せたが、今シーズンは朝倉、楠田、鹿島、GK安谷らの名女商勢、前原（高蔵女商）日浦（半田高)、杉木（稲沢高）ら地元愛知の優秀選手7人を入れて戦力は倍増した。当面の目標は愛知紡に追いつき追いこすことだ。

大洋紡、意欲的なスタート

○……大洋紡。岐阜県笠松町から名のりをあげた新顔だ。

『1年目からスパートする』という浅野監督、三浦コーチの言どおり、GKに河村、FPに真田と室蘭商出の高校優秀選手を配し、この他石井、佐々木（以上紋別南高）森本美（京都明徳商）森本恭（益田高）、坪内（本巣）などで固めたなかなかの布陣である。田村紡をはじめ強者の並んだ東海地区だけに目標と相手に不足はなく、体力的な不安を除けば、かなりの善戦を示せるだろう。

現在、女子実業団のトップチームと大学勢あるいは高校上位勢とのいちばん大きな差は体力である。

豊かな体力が多彩な試合展開につながるわけで、これが女子実業団に限った場合、一年目のチームや選手がまずぶっかる〝壁〟といってよい。

○……宗形製作所(大阪)とほていや(長野)も躍進をめざして軌道にのった活動を示す意向のようだ。

宗形製作所は中務、秋田、石川GK小林らの現有勢力に福田（東大阪高）、太田（嵯峨野高）を加えた。女子界の伝統的な名門地区である近畿に、強い女子実業団が一つもないことは残念で、宗形の成長を待望したい。

ほていやは、去年、長野県内の高校選手を集めて結成されたのだが、県外に出て試合するまでにいたらず、今年の補強もこれといった成果を得ていないようだ。

チームの熱意を実らせるためには、周囲の協力も望まれるわけで東海協会では5月の東海実業団（名古屋市）に出場の誘いをかけるという。よいことだと思う。

○……かっての全日本実業団の覇者・レナウン（東京）は、去年3月の関東実業団（横浜市）を最後にまったく姿を見せなくなってしまった。

塩川安賢氏（監督）は『4月中にチームの存廃をはっきりさせる』といっているが、再起はむずかしそうだ。同ようのケースとして揖斐川電工（岐阜）がある。レナウンも揖斐川電工も絶頂期を引きついでいたら、現在の5強時代はいっそう面白くなっていただろうと惜しまれる。このほか近江絹糸（岐阜）の活動が伝えられるが情報を得ていない。

関東学連も30周年

日本協会、岡山協会につづき、を迎関東学連が5月5日に創立30周年える。

関東学生リーグの第1戦は昭和13年5月22日の文理大（現・東京教大）一日体戦であった。

一九六七年度を顧みて

日本協会常務理事　若崎重富

一九六七年は日本ハンドボール球界にとつて、実に意義のある一年であった。

新生の希望と苦しみと、悲しみに喜びもあった。これらはすべて球界の前進の足跡を物語るものである。

協会創設以来の念願であった国内における女子の国際試合の実現。

執行部の事務的不手際から鈴木会長の辞任。

一度断念をした女子世界選手権の好転。

普及のために欠くことのできない中学校体育指導要領への復活の見通し。

球界の発展と団結を高めるために良い機会を与えた創設三十周年記念。

どれもが歴史的遺産として印象深く残ることだろう。役員も、選手も、先達の人々の築いた創業の志を受け継ぎ、一九六七年を謙虚に反省して、来る年に「深紅の情熱」を惜しみなく捧げようではないか。

学生界

春秋のリーグ戦は、各地で熱戦が繰り広げられ、その規模も年ごとに盛大になってきた。

立大（関東）、同志社（関西）、東北学院（北海道・東北）富山大（北信越）名大（東海）西南学院（九州）が、各地で活躍した。とくに、春に東海地区で、名大が常勝中京大の15連勝を阻み優勝を飾ったのは立派であった。関東勢に対す他の地区の力不足が目立っている。

ミュンヘンオリンピックを目前に控え、その母体となる学生界の成長如何が、オリンピックの勝敗の鍵を握っている。教育大の活躍は立大、芝工大を揺さ振り、日体大、法大・中央大などの奮起を促した。

クラブ

氷見ク（富山）が、全日本総合で東海学生優勝の名大（愛知）を破った健斗はクラブ勢に光明を与えた。一方全神奈川が国体で決勝戦に進出し、大崎電気に惜敗した。前途がますます広がる実業団に対し、苦しい条件が増えてきているクラブチームの力の差が決定的であった。全日本選抜にクラブチームが選抜されたのも久し振りである。

名門の桜丘会（愛知）、清水商ク（静岡）塩山ク（山梨）、中京ク（愛知）がクラブの胎動をしめしていた。女子では、全秋田和洋（秋田）、高岡女子OG（富山）、全大阪（大阪）、井原高OG（岡山）、愛媛ク（愛媛）の活躍があったが、いずれも、実業団に一矢を報いる力はなかった。

教員

大阪イーグルスが全日本のトップクラスにあって、その存在は大きい。今年も全日本のあらゆる大会に出場し、教職員チームの牽引車の役割を充分に果している。埼玉教員（埼玉）、岐阜教員（岐阜）福岡教員（福岡）山口教員（山口）、桜友会（東京）を初めチーム数も70を数え、質量とも素晴らしい。

全日本教職員大会と国体の教員の部の在り方も再検討する時期にきているのではないだろうか。大会運営に新らしい企画を開発する余地がある。

女子全般

実業団、クラブ・学生とその勢力差は明確だ。惜しまれるのは学生の普及が遅れていることと、その力に於ても他と差が開き過ぎている。三十周年記念に行なった社会人対学生選抜においても学生は歯が立たなかった。学連も女子チームの普及と技術の向上に一層の努力を要望したい。

実業団

田村紡が全日本選手権、国体、全日本選抜、実業団大会の四大タイトル獲得の偉業を成しとげた。

大洋デパート、大崎電気、愛知紡も伝統にふさわしいスピードのあるゲームを展開し、内容的にも高い技術をしめしたことは心強いものを感じさせた。三筆鉛筆はダークホースの存在を発揮したが、もう一押しというところであったこのチームの成長が実業団のレベルアップに大きく貢献するだろう。

ブラザー工業（愛知）、宗形製作所（大阪）が新加盟し、ますます実業団にかけられる期待は大きい。

クラブ

小松高OG（石川）、美和ク（兵庫）、全福井ク（福井）が全日本選手権で活躍をし、室蘭ク（北海道）、高岡女OG（富山）、井原高OG（岡山）、全秋田和洋（秋田）全大阪（大阪）、愛媛ク（愛媛）が国体で活躍をした。新らしい傾向として全県的な結束によって、実業団に一矢を報いようとする意気込みが感じられた。

高校男子

明星高（東京）が圧倒的に強かった。全日本高校選手権に2連勝し国体優勝も飾った。伝統の桜台高（愛知）、氷見高（富山）が一角を確保しているが。新進の添上高（奈良）、広高（広島）、横浜東高（神奈川）中大附属高（東京）の台頭は高校界に涼風を吹き込んだ。次代のハンドボール界を荷なう高校選手が試合に追われて、基礎技術や精神的なものをおろそかにしないで欲しい。指導者も、将来無限に成長する選手を、目先きのことにとらわれて潰さないように心を配ってもらいたい。

高校女子

東海、九州、関東、東北とその勢力が塗り変えられてきた。花巻高（岩手）と室蘭商（北海道）の東北勢が全日本高校の決勝戦でぶつかった。

山陽女（広島）、明徳商（京都）、熊本市立（熊本）、名女商（愛知）、深谷女（埼玉）新居浜商（愛媛）、栃木女（栃木）、高岡（富山）の健斗も見逃せない。

花巻高の優勝は技術的には単純であるが、良く己れを知り、守りを中心としたプレーに徹したことが勝因であった。

国際試合

残暑の厳しい9月7日西独ナショナルチームの男女総数32人の選手団を羽田に迎えた。

一行は日本に於ける強行スケジュールを受け入れ、9日、東京体育館で、男子は全芝工大、女子は大崎電気と対戦し、男子13戦、女子11戦の厳しい日程の第一歩を踏みだした。

国際試合も11人制では、西ドイツ、ルーマニアのナショナルチームを招待し、7人制一本化後には、フランスステラーチーム、中国ナショナルチームの招聘があった。

西ドイツ、男女チームの招待は、いままでの国内における国際試合とは目的とするところに大きな違いがあり、日本ハンドボール協会がミュンヘンオリンピックの対策の第一歩を踏み出したことに意義深いものがあった。この国際試合を通じて、日本ハンドボール球界が得たいくつかの収獲を挙げて見た。

(1) 全日本選抜男女チームの編成ができたことである。技術委員会が中心になり幾多の批難に負けずに、ナショナルチームの結成を計り、この指導に当ったことで、初期の目的を充分に達した。

(2) 男子で対戦した全日本、全立大、全芝浦工大は西ドイツに完勝して前途に希望を与えた。この3チームの勝因は、日本人の特徴を生かしたこと。走りまくったこと、長身外人に対する技術の研究の成果であった。

(3) 女子の世界選手権に明るい見通しができた。三菱鉛筆、大崎電気、田村紡、全日本と四勝をあげたのは見事であった。

国際試合の反省

① 外国チームの招聘は、ミュンヘンオリンピックまでの細部の計画を練る。

② 対戦するチームは原則としてナショナルチームか、これにつぐチームに限る。

③ 国際試合のための財源を確保する。具体策の一例として、「ハンドボールマンクラブ」などをOBによって作る。

審判技術

常に批判の的になるところであるが、各都道府県の大会で、一回も笛を吹いたことのない人が、全日本を笛を吹くことである。

全日本の審判員を依属されたならば、事前に規則を研究し、体力の養成に努め、次代の人のために自から進んで向上の人となってもらいたい。

最近、プレーヤーの技術が高度になってきている。これに伴なって審判技術も難かしくなってきた。また、一方で新らしくチーム数が増えてきているので、審判員の感覚の切替も必要である。大会毎に、傷害者の人数が上昇している点からも、審判員の責任は重い。依然、交通整理的な審判が多い。競技中のボールの動きは千変万化で一瞬でも、同じ状態にある筈がない。そのボールの動きを見、プレーヤーの動きに併せた行動をとらないでは、正しい判定が下せるものではない。

国体に於ける審判員の不祥事は誠に残念であった。誠実、冷静を重んじられる審判員の行動としては納得できないことである。ゴールジャッジの未熟は勝負に大きな影響を与えているので、近い将来に3人一組の審判員によるローテーションが確立されることを望みたい。

協会運営について

評議員会は協会の運命を左右する重要な会議であることは、衆知のことである。しかし、現在では、その出席数は全国の五分の一程度であって、重要議題を討議する会議とは思えない。

今年も、二回行なわれた評議員会が一部の強い意見によって決議され、後味の悪い結果に終っている。評議員会が、もっと明るい意見の交換のできる場であって欲しい。定数の問題でも、評議員会は、理事会に対して厳しい制限を加えている。

評議員会も、理事会以上の重要な役割を持っているのであるから、少くとも全国の半数以上の評議員の出席を求めたい。

執行部が女子選手権の手統の不手際をしたために、その責任を取って鈴木会長が辞任されたことは、誠に遺憾であった。これからは、益々複雑化してくる情勢の中にあって、役員が細かい神経を使わなければならないことを教訓として残した。

三十周年記念や、全日本選抜の行事を行うと在京理事の不足を痛感させられる。平常活動をしている各部門でも、一層この感が深いのではないだろうか。現行規約によって、理事の定数は規定されているが、このために協会の発展に支障があるとすれば、規約の改正を断行すべきである。

財源の問題

評議員会の席でも指摘されたとおり、世界選手権には最強のメンバーで参加したいが、個人の費用負担ができないために優秀選手を出場させられない。この問題の解決を計らない限りは充分な選手強化対策は不可能である。したがって、協会自体が、財源確保担当役員を専門において、計画をし、実践を望みたい。

一般社会の関心

東京オリンピック後の一般社会人のスポーツに対する目は高くなっている。したがって、ハンドボールも、スピードのある、高度の技術を持った試合をしない限り、社会の隅に残されてしまう。

日独国際試合の東京体育館で行なわれた全芝工大・大崎電気では観衆七千。横浜文化体育館では全立大・三菱鉛筆で超満員の四千。岩手県営体育館で男女東日本選抜を行い観衆二千二百。宮城スポーツセンターで全仙台（男）が三千。大崎電気（男女）が東京体育館で四千五百。中央大（男）、東京重機（女）が東京体育館で四千。早大（男）が早大記念会堂で三千。愛知紡（女）が愛知体育館で五千。田村紡（女）が津市営体育館で二千。菊松会（男）は広島県立体育館で二千。全京大(男)が京都市体育館で二千。大洋デパート（女）が熊本市営体育館で二千五百。大阪イーグルス(男)、全大阪（女）が大阪府立体育館で四千。全静岡（男）が静岡県立草薙体育館で二千五百。

全日本選抜（男女）が駒沢屋内球技場で二千以上のように日独国際試合における観衆の動員延人数は約五万人となっている。創設三十周年記念のときは、日本の最高水準のプレーを見ようと集った人は四千人近かった。日本の各地で、これと同等の試合をやれば観衆は必ず集ってくる。そのファンを大切にし、期待に添いたいものである。（完）

"6位内入賞"をめざして……

全日本女子が初合宿

世界のベスト・シックス突入をめざす女子世界選手権全日本代表選手団の第一次強化合宿が3月19日から5日間三重県四日市市の田村紡績で行われた。

この強化合宿は、11月上旬に予定される出発まで（注・大会は11月16日から24日。ソビエト）5回にわたって行われるその最初のもので役員4、選手13人が顔を揃えた（大洋・新保選手は勤務の都合で欠席）。今回の合宿の狙いは『チームワークをとることと、選手たちにどの程度の基礎能力（体力・技術）があるかを知るため』（小袋是郎監督の話）で5日間（一日6時間）の強化スケジュールもすべてこの点を主眼に組まれた。第一日（19日）は大阪から中出盛雄、高山政悟、望月伸三郎三氏の応援を求めて多角的な"体力測定"を行った。

第二日（20日）以後の実技は基礎体力の習得が中心。

さすがに全国からよりすぐられた優秀プレイヤーの集りだけに寸秒のムダもない練習の流れを見せて監督、コーチ陣を喜ばせた。

このため第四日（22日）の午後に地元の男子高校チームとの練習試合が特に加えられた。2月の全日本実業団選手権（熊本市）以来、久しぶりにボールを握った選手たちはイキイキと動いていたが初めての顔合せだけに配球と攻守のコンビネーション・プレーにはとまどい勝ち。しかし、要所を逃さぬ試合運びは、互角以上の戦いぶりだった。

期間中、折あしく雨の日がつづき、屋外（田村紡）コートが使えず富田中学体育館を借用、授業の関係で、練習時間が早朝5時半から3時間、夜は午後6時からになるなどしたが、選手たちは故障もなく、元気に合宿を打ちあげた。

監督・コーチ陣は、今後は長身者に対する戦法の研究と習得、外国遠征のハンディを克服できるだけの精神的なたくましさを養うことに重点をおいて合宿プランをたてるといっている。

第二次以後の強化合宿日程（予定）は次の通り

▽第二次　5月24日～6月5日（四日市市・田村紡）

▽第三次　7月27日～8月10日（長崎市又は熊本市）

▽第四次　9月30日～10月9日（福井県高浜町＝予定）

▽第五次　10月25日～30日（場所未定）

代表団、全日本総合出場か

日本協会では世界選手権に出場する全日本女子代表チーム（田村紡7、大洋、大崎各3、三菱鉛筆1人）を今夏長崎市で開く第20回全日本総合選手権大会に特別出場させることを内定した。詳細は、日本協会技術部と代表団などの打ち合せで決める。

【お詫び】本誌51号3頁、世界選手権全日本女子代表団メンバー中FP長谷川邦子選手（田村紡、21才）の名がもれていました。お詫びいたします。（編集部）

中学教材への復活を切望

～地方協会の一般施策意見～

"日本リーグ"開催にも期待

日本協会普及部が、このほど地方組織（都道府県協会）に対して行った普及に関する諸調査のうち一般施策に対しての要望・意見がまとめられた。回答は47都道府県協会のうち40協会（＝3月10日現在）で、もっとも強い希望が打ち出されたのは「中学校体育の教材にして欲しい（中学校体育指導要領への復活）」ことである。多くの地方組織は、中学指導要領に採用されれば、頭打ち状態の普及に対しても多くの伸びが期待できるとしている。

また、なんらかの形で「補助金が欲しい」という訴えが多いのも地方組織の台所の苦しさを現わしており、日本協会としても多年の懸案であって、早急に打開策が望まれながら、これといった手が未だに打たれていない。この問題と関連して「登録料をさげて欲しい」としたものが25協会に及んだことは、協会財源にとって軽視できぬ課題をふくんでいよう。

「指導者が欲しい」「指導書が欲しい」という要望が見られるのは、日本協会が重点的なトップレベル強化対策を具体化しようとしている矢さきだけに、今後どう調整するか問題となってくる。ブロック単位の技術指導部の設置、あるいは昨年から実施した全国公認コーチの活用、有力チームの地方転戦などが考えられよう。

注目されるのは「日本リーグがあるとよい」としたものが16協会に及んでいることで特に東北、北陸、近畿地区の各県に要望が固まったことは興味深い。この問題は、2月の全日評議員会では、実業団連盟内に実行委員会を設けて検討することになっているが、地方協会の強い要望があるとはいえ実行に移すまでにはいくたの難題が積まれているといってよいだろう。なおこの調査で全日のハンドボール競技が行える体育館数は一六一（40道府県協会）と発表された。普及部では今回の調査結果を関係各パートに廻して検討し、地方組織の要望にそうよう努力するといっている。

東海ブロック43年度日程

東海協会では今年度の事業日程を次のように決め発表した。

▽東海学生春季リーグ戦　4月27日～5月5日（名古屋）▽第4回東海実業団選手権　5月19、26日（愛知県体育館）▽第20回全日本総合選手権東海予選6月23日又は7月7日（静岡）▽第15回東海高校総体ハンドボール競技6月29、30日（岐阜）第20回東海選手権（兼国体予選）8月24、23日（名古屋金山体育館）▽東海学生秋季リーグ戦10月26日～11月10日（名古屋）▽第8回東海室内選手権44年2月23日（三重）

五月に全国大会 審判員研修会(予定)

――審判部――

日本協会審判部は、3月27日に審判審査委員会を、3月28日に審判部合同会議を日本体育協会会議室で開き、重要事項を審議した。

重要と考えられるのは、審判審査委員会によってうちだされた、審判審査方法の改正と競技規則の全国統一を図るために案出された全国大会審判員研修会であろう。

前者はかねてより県案の事項であり、数回にわたり審判審査委員会・審判部合同会議で討議されてきた問題であり、以下のような結論が出された。

審判審査に関する規定

(1)審査の回数　　年1回

(2)審査の時期　書類提出期限11月30日、年度内(1月)に審査を行なう。

(3)審査料および申請に必要な年限

D級　認定料一〇〇〇円

C級　審査料五〇〇円、認定料五〇〇円、計一〇〇〇円

B級　審査料五〇〇円、認定料一〇〇〇円、計一五〇〇円

A級　審査料五〇〇円　認定料一五〇〇、計二〇〇〇円

D級からC級に申請の場合は、D級取得してから一年を経過していること。

C級からB級に申請の場合にはC級を取得してから二年を経過していること。

B級からA級に申請の場合にはB級を取得してから二年を経過していること。

(4)審査の方法について

B級からA級の申請について

イ　書類

ロ　審判技術を見る。
　全国大会の審判員を経験すること。予備申請をする(6月末日まで)

ハ　日本協会が主催する研修会(43年度は国体、教員大会、高校大会、実業団大会の際開催する)4回のうち1回に必ず出席していること。

ニ　審判経験(審判数)、B級を取得してから50試合以上の審判をしていること。

C級からB級の申請について

イ　書類(ブロック審判部長の推薦をうける)

ロ　ブロック大会の審判員を経験していること。

ハ　申請の前の2年の間に行なわれた研修会あるいは講習会に、年1回以上必ず出席していること。

ニ　審判経験(審判数)C級を取得してから30試合以上の審判をしていること。

D級からC級の申請について

イ　書類

ロ　講習会あるいは研修会に年一回以上出席していること。

D級申請について

イ　書類

ロ　講習会に年1回以上出席していること。

※　書類はD級を申請する場合は申請書・写真、C級以上を申請する場合には、申請書・審判手帖を提出する。

講習会・研修会

公認審判員研修会

昨年実施して好評であったA級審判員研修会を拡大して、公認審判員研修会として、その都度、テーマを設けて研修を行なう。その時期場所は次の通り。

1高校選手権大会　　於広島
2教職員選手権大会　於奈良
3国民体育大会　　　於福井
4実業団選手権大会　於横浜

全国大会審判員研修会

従来問題になっていたルール解釈の統一への第一歩として、この研修会は開催することになった。

大会毎の申し合せ事項をなくし43年度中の各大会がすべて同じルール解釈によって進められるようにし、併せて審判技術を高めようとするのがこの研修会の目的となっている。これによって、全国大会の笛はほぼ統一できることになろう。

大会審判員も年初に決められるので、すべてが計画的にできる点大きな進歩といえよう。

予定では、五月に青少年スポーツセンター(オリンピック村)を宿舎にして、関東学連新人戦によって研修することになっている。

伝達講習会

従来の中央講習会を廃止して、ブロック毎にブロック審判部長が中心になって、伝達講習会を開催することになった。

この際、隣接ブロックの審判部長あるいは審判部員が少なくとも1名は出席して協力することとなった。

ブロック審判部の拡充に伴い、このような方針がとられることになった。

規則書における問題点

▼用具について

ゴールネットの改造については目下、技術委員会と共に検討をしており、近く結論がでる予定。

▼規則上の問題点

12の2　ゴールキーパーがゴールエリアラインをふみもしくはゴールエリアを通過した後、ゴールスローをした場合にはフリースローする。

その他の場合にはやりなおしとする。

17の6〔原注〕競技者に対する注意は必ずしも文章のような形にはこだわらないが、原注にある形に近づけることが望ましい。

17の15　通常の場合にはタイムキーパーの笛で終了する。その際に7Mスロー、フリースロー、コーナスローが行なわれる場合にはその一投の結果を見て終了する。

▼運営上の問題点について

▽背番号の問題

1からエントリーの数までの背番号をつける(たとえば15人エントリーの場合1から15)

ゴールキーパーは1及び11をつけ、三人目のキーパーは12から15までの間の背番号をつける。

▽記録用紙について

記録用紙には退場の項を設けてそこに退場させられた選手を確実につけ、退場の順を明らかにすることになった。

以上が、3月27・38日の両日、審判部で話し合われ、決定した内容の大要であるが、多くの改善点があるので、ここに収録した。

ルールの統一解釈について、大きく一歩を踏み出したことが特筆されよう。よりよい審判技術が全国の津々浦々に善及し、技術の向上につながることが望まれる。

ルールのうつりかわり

審判部長　安藤純光

端線　2.44米　7.32米　側線　中央円　中央線　9米　90〜110米　先入線　罰域　13米　16.5米　内域　隅　罰隅　決勝門　16.5米　55〜65米

ハンドボール競技が日本に入って来て以来、数多くの競技規則が発行されて来た。

ルールの改修正点も多くあり、言葉づかいもそれぞれの世相を反映して大きく変ってきている。

7人制だけで育った人々には、耳なれない11人制ハンドボールも往時を知る人に云わせれば、ハンドボールと云えば、11人制のことであり、7人制などと云うものは知らなかったということになるであろう。

ルールの変遷を跡づけ、現在のルールを産み出したものを考えていきたい。本誌では、日本協会審判部長安藤純光氏にこのルールの変遷をふりかえってもらうことにした。

第1回のルール

『送球競技は各々11人の競技者よりなる2組が対戦する競技にして、その目的は球を相手方の決勝門に投入し、同時に相手方の攻撃に対し味方の決勝門を守るにあり。各組は競技に使用される球を相手方の決勝門に投入し、味方の決勝門を相手方の攻撃に対して防禦することに努力せねばならぬ。球を使うには専ら手を用い、門衛のみは特に足を以て防禦する事を許される。

組の編成は5人の前衛、3人の中衛、2人の後衛、1人の門衛よりなる。門衛は決勝門を守り、その前に2人の後衛を置き、後衛と前衛との間に中衛を置く。

競技は中央前衛が競技場の中央で初投をなすことにより開始し、前衛は相互の投球により球を相手方決勝門の投入すること即ち、攻撃に努め、中衛及び後衛は相手方前衛の攻撃を門域以外の競技場に於て防禦する任務を有す。防禦に成功すれば、中衛は味方の前衛に助力せねばならぬ。1組が球を相手方の決勝門へ投入する事に成功すれば得点を得らる。然して、次の初投は得点を取られた側によって為される。試合時間が半分経過すれば場所を交替する。

得点の多き組を以て勝者とす。両組の得点が同点又は無得点の場合は無勝負とする。但し勝敗を決める要ある時は延長戦を行い、尚得点なき場合は無勝負に終る。

競技は1人の主審と之を補佐する2人の線審及び2人の門審により管理される。主審は競技規則の遵守を監視す。競技者は如何なる場合に於ても主審の命令に服従せねばならぬ。

送球競技は身体と球の取扱技術（身体技術、球技術）及び作戦技術を必要とす。従って競技熟練の為には体操、競走、跳躍、投球、捕球及び作戦等の工夫を必要とされる。』

これは、昭和13年6月12日日本送球協会発行の「送球競技規則及ビ其ノ解説」の巻頭にある競技の概念である。

この文章は、11人制（フィールド）の概念であり、言葉の使い方がちがうにしても今日の規則書にある競技の概要の源であるのでとくに全文を引用した。

11人制のみのルールブック

今日わが国のハンドボール競技は7人制ハンドボールに一本化されているが、当時は11人制ハンドボールであり、7人制ハンドボールはこの競技規則書には顔を見せていない。以下すこしの間今は過去のものとなって11人制ハンドボールの競技規則をたどってみよう。

競技規則の変せんをもっとも具体的に示すものの一つは競技場の変化であろう。

競技は競技場によって制約を受けるものであるが、当時の競技場はどんな形のものであったろうか。上の図にあるような複雑なものであった。

競技場の大きさおよびゴールの大きさは、サッカーのそれと同じであった。門域（ゴールエリア）は半径11mで、作図の方法は現在の方法と同じである。その外に13mラインをひく。先入線（オフサイドライン）は、端線（ゴールライン）に平行に16・5mの点で側線（サイドライン）と平行に端線を先入線を結び、この罰域線、先入線、端線によって区切られた地域の門域（ゴールエリア）を除いた部分を罰域（ペナルティエリア）と呼んだ。そして端線と罰域を区切っている線の交点を罰隅（ペナルティコーナー）と呼んだ。中央線（センターライン）の中点を中心に半径9mで中央円（センターサークル）をつくった。これがハンドボールの競技場であった。

このときの競技規則の二、三をひろってみると、

先入（オフサイド）がある。「球が先入域外にある時先入域内に在る攻撃側競技者は先入の位置に在

るものとする」。「先入の位置に在る者が競技に関与したる場合は防禦側に自由投を与える」。「球を持ちて先入域内に入りたる競技者は先入に非ず」とある。つまりボールより先に攻撃側競技者が先入線（オフサイドライン）を越えて攻撃してはいけないということである。

○罰隅投（ペナルテイコーナースロー）は「味方の門域に踏み込みたる場合」。「門衛投が不当なる場合」。「防禦側が門域内に在り又は転がれる球を取り出すか、又続けて競技したる場合」などに行なわれる。「罰隅投は罰域線と端線との交点から行われる」とある。

○自由投（フリースロー）は「自由投は反則が行はれたる地点より行う。攻撃側の自由投に於いて反則地点が門域に6米より近き場合は、防禦側のみ門域線上に並ぶ事を得。攻撃側の競技者は自由投の終る迄、門域より最低4米離れ居らざる可からず。此の場合の自由投は少くとも門域より4米離れて行うべきものとする……」とある。

以上は日本ハンドボール協会設立当時に発行した競技規則書からのぬき書きである。

戦後のルール

その後第2次世界大戦をはさんで競技が中断され、規則改正はなかった。そして昭和25年に競技規則が改正され、規則書の中の用語もより現代的なものにあらためられた。この改正で競技場は大きく変更された。すなわちペナルティコーナーがペナルティポイントになり、そしてオフサイドラインが廃止され、そのかわりにゴールエリアラインに6ｍの間隔をおいてフリースローラインが点線でひかれた。オフサイドラインはGKから数えて3人目（防禦側競技者）を通るゴールラインと平行なライン（3人目が移動すればオフサイドラインはそれにつれて移動する）となった。

オフサイドの廃止

ついで昭和27年9月からオフサイドが廃止され競技者は、ゴールエリア以外の競技場をボールの位置に関係なく自由に動くことができるようになった。

交代を認める

29年には、チームの構成が13名になりゴールキーパーに対して1名、フィルドプレイヤーに対して1名の交代競技者が認められた。しかし交代は、それぞれ1回に限って認められ、女子や少年の場合には4回まで交代することが認められた。

女子7人制1本化

昭和32年には、女子の11人制は廃止され11人制は男子のハンドボールとなった。ゴールエリアラインは、ゴールラインの中点を中心として13ｍの半円でえがかれ、したがってフリースローラインは19ｍの半円となり13ｍラインは14ｍラインと改正された。さらにペナルティスローは廃止され、全面的にフリースローとなった。新らしくゴールラインから35ｍのところにゴールラインと平行に35ｍラインが設けられた。この35ｍラインとゴールラインとの間には攻防とも6人まで入ることができる（ゴールエリアにいるゴールキーパーを除く）。この人数を越えた場合には、攻撃側の場合フリースロー防禦側の場合14ｍスローが行なわれた。

全員防御不可能に

この結果全員防禦が不可能となり、中盤でのプレイも見られるようになり、得点の数も増してきて競技の興味も増し、勝つためには15点は必要になった。33年は、13名以内であれば交代は制限なく何回でも交代できるようになった。以後11人制を廃止する38年までさしたる改正はなかった。

7人制は29年から

7人制（室内）ハンドボールの競技規則は29年発行の規則書の後半に見られる。

競技場は、長さ30ｍ～50ｍ、巾15ｍ～25ｍであり、望ましい大きさの競技場は長さ40ｍ、巾20ｍであるとされている。

ゴールエリアは立体としてあつかわれていた。したがって現在のようにジャンプシュートをすることはできなかった。チームは10人で構成（3名の交代競技者）された。競技時間は、成人25分－10分－25分、少年20分－10分－20分、女子15分－10分－15分で、延長戦の場合は成人および少年の場合には10－10分、女子7分－7分であった。競技はレフェリーの笛によって終了した。

32年には、女子のハンドボールは7人制だけになった。望ましい競技場の大きさは長さ44ｍ、巾22ｍとなり、延長戦は、成年男子および高校男子の場合には第1延長10分×2、第2延長5分×2、第3延長5分×2で女子および少年の場合には第1延長7分×2、第2延長5分×2、第3延長5分×2となった。

ハーフタイム、競技終了は37年までタイムキーパーの笛によって行なわれた。

ゴールエリア平面に

33年には、チームの構成は現行のものと同じ11名となった。ゴールエリアは平面となりジャンプシュートが可能になった。

35年には、競技時間が成年男子30分－10分－30分、高校男子25分－10分－25分、女子・少年20分－10－20分となり、延長戦は第1、第2とも5分×2となった。

7人制1本化

38年に日本ハンドボール協会は11人制ハンドボール（フィールド）を廃止して7人制一本にきりかえた。競技終了は、レフェリーの笛によって行なわれるようになった。

また競技規則書の他に、「ハンドボール競技公認競判員必携」が作られ「判定に関する申し合せ事項」「審判技術について」など競技規則解釈の統一をはかった。

39年には、選手の交代は現行のセンターラインとサイドラインの交点の附近に指定され、レフェリーのジェスチャーは最少限度にとどめるようになり、このためにゲームは一層スピード化された。

40年には、フリースローの笛がなくなり、ハンドボール競技はますますスピード化されることになった。

そしてこの度の大きな改正によって、ある部分はもとにもどった点もある。

以上、競技規則の変遷について概略を見たが、何分にも資料が不足で、たらざる点が多いと思う。

中学ハンドボールの現状と問題点

日本ハンドボール界はいま多くの問題をかかえている。
大はオリンピック対策から、小はあなたのチームのボール代まで……。
そこで編集部では、特に地方や各チームが共通している悩みを随時とりあげて、読者諸兄とともに切り開いていくべき道を見つけ出したいと思う。
第1回は、中学ハンドボールの現状を採りあげてみたが、このようなテーマをという希望があればお寄せ願いたい。

▽…現在、ハンドボール部を正式に設けている全国の中学は男女のべ四百五十校と想定され、大会の前に臨時編成する中学がその半数(約二百校)、両者合せて六百五十校、各チーム20人平均の部員として一万三千人の中学ハンドボーラーが活動していると想定できる。

去年発表された体協の日本スポーツ人口調査で、中学運動部設置率(調査校・全国九七七〇校)の最高を示したのはバレーボールの92・8%で以下卓球、軟式野球、陸上とつづきハンドボールは3・7%(三百六十二校、一万一千二百二十三人)で17位という結果だった。

▽……この数字に対して、日本協会普及部あたりのみかたは開拓の余地ありとして地方組織に対して積極的な中学への普及を督励しているが必しもよい材料ばかりとはいえない。

特に、ハンドボールという競技が〝特殊目〟的な目で見られていることがあい路になっているのは問題だ。

中学の運動部は、生徒の趣好で設置され、それだけで学校としての予算ワクいっぱいになるケースが多い。よほど熱心な先生がいないかぎりハンドボール部が新設されることは難しい。

▽……ハンドボールだけの問題でなく、中学校体育の当面している問題は多い。入試とクラブ活動・クラブの担任の先生の問題等々現在の日本教育界の当面している問題がそのまま中学体育の問題にもなっている。その中でも〝特殊目〟視れているハンドボールの置かれている立場は困難な問題が山積している。それをいかに打解していくかこれは単に中学校だけの問題でなく、日本ハンドボール界の問題でもある。

▽……〝特別〟視されないためには、ハンドボールそのものがもっとポピュラーなスポーツに成長しなければならず、これは中学校球界だけの課題というより、日本ハンドボール界自体の最大の課題だ。

わずかにでも、この状態が〝好転〟するとしたらば、それは「中学指導要領」への採用以外にないだろう。

また、その市なり町なりに例えハンドボール部を持つ中学校が一つもないとしても各県協会が教育委員会に働きかけて、ハンドボール大会を開き、各校から代表チームを参加させてもらうような積極策も必要なのではないだろうか。

▽……かって、関東のある大学が伊豆の中学で夏季合宿を行ない、それがキッカケとなってその中学にハンドボール部が生まれた(もっとも3年間ほどで解消してしまったが……)という話も、ヒントになるのではなかろうか。

まとめとして活発な中学球界を形成している県関係者からの現状報告を掲げてみよう。なお、中学のハンドボールをいかに指導するかという問題については機会を改めて特集したい。

愛知県中学球界の実情

西川勤也

現在愛知県において実施している校数は別表のようです。

クラブを活発に活動しているチームは実施校の半数程度で、男子チームに多く、女子の場合は少ない、試合が近づくと臨時に編成され大会に出場するチームが多くある。

技術面については一部チームをのぞき指導者の不足でレベル差が大きく試合内容が一方的になって自信をなくし活動が低調になることが多い。

県協会として指導者養成が急務中体連ハンドボール指導者を対象として四〇年度に審判講習会、四一年度指導者講習会を開催して一部普及の遅れている地区の発展につとめたが現在指導要領にハンドボールが除外されているため一般に関心が薄くサッカーのような発展は現在望むことは無理と思われる。

ハンドボールを今後中学校で発展させるには四四年度改定される指導要領にハンドボールを取り入れるよう積極的に関係当局に働きかけていただくことによってその発展と共にミュンヘンでの好結果につながるものと思います。

(愛知協会常任理事)

愛知県中学ハンドボール部の実態

地区名		学校数	実施校	実施率
東三河	男	62	15	24.2%
	女	62	8	12.9%
西三河	男	65	8	12.3%
	女	65	6	9.2%
名古屋	男	74	18	24.3%
	女	74	10	13.5%
東尾張	男	47	7	14.9%
	女	47	7	14.9%
西尾張	男	53	16	30.2%
	女	53	14	26.4%
私学	男	7	1	14.3%
	女	14	1	7.1%
合計(県全体)	男	308	65	21.1%
	女	315	46	14.6%

東京都中学校球界の実情

松田利秋

前の名部長山岡二郎氏（前日本協会常務理事）の十八年にわたつて育てられた都中学ハンドボール部は古い伝統と輝かしい実績を持っている。その後躍進とは云えないが加盟校も毎年増加している。現在加盟校は四十二（男子チーム四十、女子二十四）を数へる。

役員諸氏の団結と努力の賜である。競技会、その他運営について一度も紛争を起した事なく、家族的なつながりで結ばれ、また都協会とも親密である。然し問題が無いという事ではない。その中から都だけでなく全国中学校球界の当面の問題としているものをあげると、まず第一に、文部省の示す体育指導要項に必修教材として入っていない悩みである。次の改訂を機に、是非共必修にいれるか、他の必修を出来るだけ圧縮して、選択教材の中にいれ、各地の実情により自由に実施できるような工夫を望むものである。この事は球界の普及発展につながる大切な事で、協会も中学校も努力して推進しなければならない。

第二にクラブ活動の時間の問題である。最近いわゆる教員の超勤問題でクラブ活動にブレーキのかかる傾向が見える。毎日の練習が困難になるばかりでなく、土、日の引率について、出張を認めないところも出ている。これは、教委や校長が代休を与えたり、出張旅費を支給しなければならない事を苦慮してである。ある県の如きは活動は勤務時間内に行えなど、無責任な発言をしているという事だ。第三に経費の問題である。私費軽減、公費負担の声が高まり（結構な事ではあるが）部の運営、大会の実施に多大の困難が伴うようになってきた。各県によって種々ちがうが、都では部費一校二〇〇円大会参加費五〇〇円を徴収しているが、会場費、通信費、用具費等でせい一杯、役員昼食代、交通費など捻出に苦しむ事になる。幸い都協会の応援で夏の大会を駒沢で実施できる事は感謝しているが、新人戦や他の大会では、そうはいかない。また公費負担といっても一校にボール五個を支給、二年使用可能という事では話にならない（備品消耗品は生徒から取るなという例）第四に対外試合についての文部次官通達の緩和について、協会、学体連、マスコミで論議されている。オリンピックにも勝ちたいが学校体育の現状からいつて、問題がある。充分審議して、健全な中学生の身心の向上をはかる結論がほしい。

最後に、ドイツチームの来日に際して、見学にいった中学生は、そのすばらしい技術、好プレー、審判に対する立派な態度等感銘を受けた事と思うが、他方粗暴な行動の場面が多くあった事は、好い影響を与えなかった。次の機会に期待する事が大である。（東京都中体連ハンドボール部長）

ソ連、宿願の「世界」タイトル

世界学生選手権終わる

第3回世界学生選手権は去る1月4日から12日まで西ドイツに15ケ国の代表が参加して開かれた。4年後のミュンヘン・オリンピックをめざす各国の有能な若手プレイヤーがほとんど顔を揃え、国際学生スポーツ連合のネビオロ会長（イタリア）も、会場に姿を見せ、近い将来ユニバシアード大会の正式種目に加えられるのではないか、といった明かるい予測もコートサイドにとんだ。

予選リーグは順当な結果に終わったが、決勝トーナメント（各組上位2国）に入って、2連勝を狙う地元・西ドイツがチェコに惜敗する番狂せがありベスト・フオアの顔ぶれはルーマニア、チェコ、ソビエト、スウェーデンとなった。

準決勝ではルーマニアが、チェコを接戦で降したあと、ソビエトがスウェーデン（第1回大会優勝国）を圧倒して快勝、ソビエトールーマニアの決勝戦となった。

史上初めて「世界選手権」を獲得するチャンスをつかんだソビエトは前半、エースのクリモフを中心とした攻撃力を存分に発揮して優位に立ったが、後半、グネスク、グルイアを軸にしたルーマニアの懸命な反撃にあい、延長にもつれこんだが、1点差で初優勝を飾った。

なお、日本はこの大会には参加しなかった。

▽予選リーグ結果

Aグループ①ソビエト②チエコ③フィンランド④オランダ

Bグループ①西ドイツ②デンマーク③ベルギー

Cグループ①スウェーデン②フランス③ポーランド④オーストリー

Dグループ①ルーマニア②ノルウェー③スペイン④イスラエル

▽決勝トーナメント1回戦（準々決勝）

ルーマニア 20—9 フランス

スウェーデン 18—13 ノルウェー

チェコ 26—25 西ドイツ

ソビエト 記録不明 デンマーク

▽同敗者戦

西ドイツ 30—15 フランス

ノルウェー 12—6 デンマーク

▽同勝者戦（準決勝）

ルーマニア 15—15 チエコ

ソビエト 25—19 スウェーデン

▽7・8位決定戦

デンマーク 18（8—8、10—3）11 フランス

▽5・6位決定戦

西ドイツ 22（8—9、14—8）17 ノルウェー

▽3・4位決定戦

スウェーデン 23（12—9、11—10）19 チェコ

▽決勝戦

ソビエト 17（11—7、5—9、1—0、0—0）16 ルーマニア

得	【ソビエト】		【ルーマニア】	得
0	ウイルソン	GK	ペ　ヌ	0
0	クスチビリ	GK	オルバーン	0
2	ズドレンコ	FP	スペク	0
0	フクハカーゼ	FP	サムヌギー	0
7	クリモフ	FP	リース	3
2	マクシモフ	FP	グネシュ	7
3	シヤユク	FP	ニ　カ	0
0	パノフ	FP	コスタケ	0
0	エフィモフ	FP	ガーツ	4
3	グルビス	FP	グルイア	2
0	ゾドフ	FP	モルドバン	0
17				16

（注）この大会の出場選手は大学在校生のほか2年前の卒業生までチームに加えられる。

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

藤本　強
杉山　茂

○…一九七二年のミュンヘン・オリンピックをめざす世界各国―とりわけヨーロッパ・ハンドボール界の強化対策はシーズンをおうごとに激しさを増すばかりで、これまであまり〝外出〟をしなかったナショナルチームがつぎつぎと国境をこえて腕をみがいているといわれるのは、うらやましいかぎりだ。

強化への執念のはげしさは、ナショナルチームの遠征のほか、有名外国コーチの招へいや主力選手の引き抜き（?）にまで発展している。

ゆれ動く花形プレイヤー

○…昨年、春のシーズンの話題をさらったVfL・グンメルスバッハ・クラブ（ヨーロッパ・カップ優勝）は、西ドイツ球界のトップチームで、多くのナショナルプレイヤーをかかえているが、ヨーロッパを制はしオリンピックの主力を占めるためにコーチとして東ドイツからホルスト・ドライシヤンとヘルムート・コスメール（兼選手）が招かれたほか、GKとして西ベルリン警察クの花形ベルント・ボダクを、ポイントゲッターとしてかってダイナモ・ブカレスト（ルーマニア）で活躍していたジョアン・シュミットをチームに引き入れている。

シュミットは全国リーグでリーディングゲッターとなるなど優勝に予想通り一役買ったが、昨年3月ヨーロッパ・カップ準決勝のためグンメルスバッハがモスクワに遠征しようとした際、シュミットとコスメールはボン駐在のソビエト大使から同行が許可されないという騒ぎになってしまった。

○…こうした傾向は、今シーズンはいっそう激しくなり、特に西ドイツは地元でのオリンピックだけに活発だ。例えばエッセンのフェニックスクラブはコーチとしてルーマニアのヴィルギィル・フナアトを迎え、プレイヤーとしてはフランスのリヨンに居たペトル・イヴァネスクを得ている。

イヴァネスクがモーゼルらとともにかってのルーマニアの有力ゲッターであったことは御承知の読者も多いハズである。

○…一方西ドイツから去った選手としてはズラトコ・ザグメスターが居る。

彼は第5回世界選手権でユーゴの新星として評判になったプレイヤーだが、その後西ドイツのゾーリンゲンのユニホームを着て、ゾーリンゲンを全国リーグ入りさせるのに大いに貢献した。

それが今シーズン途中のグンメルスバッハ戦の後、急に再び故郷のザグレブ（ユーゴ）に帰ることになったもので、IHF公報でも彼のカムバックを採りあげ「ユーゴがオリンピックに備えるためには、ザグメスターの一働きを期待する以外にない」と伝えている。

一九七〇年を期して同選手の復帰にユーゴーが一生懸命であったのも当然であろう。このように花形スターが引きぬかれるのは枚挙にいとまがない。国境をこえて強化するのであるから、すさまじい。

積極的なフランス

○…補強（?）ばかりではなく各国のトップレベル強化は積極的だ。

なかでも、世界選手権のホスト国・フランスの動きは活発で昨冬12月のスペイン戦を第1戦に3月までに11試合（8ヶ国）の公式国際試合を行い、7勝4敗の成績。

○…いささか旧聞になるが、東ドイツが伝統の11人制を捨て7人制主体化に踏み切り、そのあとで同国協会はこれまで11人制のシーズンだった夏の間は一切ハンドボールをやらず、陸上競技による体力づくりに置きかえることにした。そして、東ドイツのナショナル・プレイヤーとなるからには少くとも次のような〝記録〟を持っていなければならないという「最低限達成値」を公表した。

▼30M走　4秒以内▽50M走　6秒以内▽100M走　11・6秒以内▽走高跳　1・65M▽走巾跳　5・80M▽砲丸投　10・50M▽400M走　55秒以内▽コンビネーション・テスト＝50M走を4回、次にボールを持ち50M走を行いもういちど50M走って最後にゴールシュート＝このコースを通算42秒以内。

この成果があってか、別掲のとおり東ドイツは強豪チームを相手に今シーズン無敗と快調な進撃を続けており、前回の不振を一挙に挽回しようと努力している。

警察と高校の国際大会

○…ヨーロッパ情報の大半はナショナルチームの動向だが、めずらしく警察チームのヨーロッパ選手権と高校試合のニュースが入った。

警察大会は3月コペンハーゲンで開かれたもので、6ヶ国から代表が参加、フランス―デンマークの決勝となり、ファイエ、タンクレエなどナショナル・プレイヤーを持つフランスが19―17でデンマークを破り優勝、3位は東ドイツ、4位はスウェーデンだった。

○…高校大会は、昨年くれオランダで開かれた。ジュニア（ユー

ソ協会からも承諾電報

日本女子の世界選手権参加

日本協会は、2月24日付でソビエト協会から「第4回世界女子7人制選手権大会への日本の出場をうけ入れる」という電報をうけとった。

これは、日本の同大会出場申しこみ書の遅延に対してIHFが、それをうけ入れるかどうかを、主管国のソビエト協会に全面委任していたことに対する回答で、これで全日本女子の世界選手権出場が正式に決まった。（IHFからの連絡はすでに来ている）

同大会は前回優勝国のハンガリー、地元ソビエト、ヨーロッパ予選勝者6ヶ国それに日本の合計9ヶ国で行われる。

また、近着のIHF公報も日本のアジア代表としての参加を認めたとしている。

ス）に力を入れるオランダのこの国際高校トーナメントはシーズンごとにその規模が大きくなっているが、今回は男子は6ケ国から10チーム、女子は5チームが出場した。

その結果、男子はコペンハーゲン選抜（デンマーク）がマルティン（チェコ）、ザグレブ（ユーゴ）などをおさえて優勝、女子はザグレブが首位になった。

国際試合の成績

本年の女子世界選手権、1970年の男子世界選手権さらに1972年の男子オリンピックへと各国は強化に懸命、今冬ほど国際試合の多かった年は他にないと云われている。本誌でざっと調査しただけでも、次のように多くの試合が行なわれている。

男子では東ドイツの無敵ぶりがまずあげられよう。西ドイツ、ユーゴーも快調。デンマークがチェコを破り、ノルウェーに破れるという番狂せもおきている。

女子も東ドイツが快調。ルーマニア、チェコ、ユーゴー、デンマークが熱戦を展開している。

男子

東ドイツ	18—14	ハンガリー
東ドイツ	29—18	ハンガリー
東ドイツ	15—13	ソ連
東ドイツ	21—12	ソ連
東ドイツ	21—19	スウェデン
西ドイツ	25—16	ノルウェー
西ドイツ	23—20	デンマーク
ルーマニア	28—16	西ドイツ
チェコ	21—19	西ドイツ
西ドイツ	20—19	ソ連
フランス	11—9	スイス
フランス	15—14	スイス
ユーゴー	24—10	スイス
ユーゴー	18—13	スイス
ユーゴー	23—16	フランス
フランス	23—9	オーストリア
フランス	19—15	オーストリア
ソ連	19—18	フランス
ソ連	22—16	フランス
チェコ	19—17	アイスランド
チェコ	18—14	アイスランド
デンマーク	16—14	チェコ
スウェデン	20—13	デンマーク
スウェデン	12—10	デンマーク
スウェデン	23—16	フィンランド
ノルウェー	11—11	デンマーク
ノルウェー	15—14	デンマーク
ノルウェー	19—14	オランダ
ハンガリー	25—21	オーストリア
フィンランド	28—16	ポルトガル
スペイン	19—15	フランス
スペイン	26—10	ポルトガル
フランス	21—17	フィンランド
フランス	29—12	ポルトガル
スペイン	24—17	フィンランド

女子

ユーゴー	11—7	ポーランド
ユーゴー	9—5	チェコ
チェコ	14—12	ポーランド
東ドイツ	12—8	ルーマニア
東ドイツ	9—8	ルーマニア
ルーマニア	12—10	西ドイツ
西ドイツ	10—3	ノルウェー
ルーマニア	11—9	デンマーク
チェコ	10—7	ハンガリー
チェコ	10—5	ポーランド
デンマーク	7—5	チェコ
オランダ	10—9	ノルウェー

ヨーロッパカップ大詰へ

男子第9回・女子第8回のヨーロッパ杯選手権大会は本誌50号57頁に既報のとおり、昨年末にヨーロッパ各国の優勝チーム男子22、女子9チームによって開かれており、熱戦が展開されている。

▽男子二回戦

フレデンスボーグ（ノルウェー）	2勝	21—9 17—10	ハポエル・ペター・チクバ（イスラエル）
SCディナモ・ベルリン（東ドイツ）	2勝	30—11 37—11	SCラピッド・ウィーン（オーストリア）
ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）	2勝	29—10 37—14	HBデュデランゲ（ルクセンブルグ）
UK51ヘルシンキ（フィンランド）	1勝1敗（得失点差）	15—18 29—15	ディミトロフ・ソフィア（ブルガリア）
グラノラース・バルセロナ（スペイン）	1勝1敗（得失点差）	16—20 26—16	SCポルトガル・リスボン（ポルトガル）
デュクラ・プラーグ（チェコスロバキア）	1勝1敗（得失点差）	25—12 18—22	ホンブット・ブタペスト（ハンガリー）
VfLグンメルスバッハ（西ドイツ）	2勝	19—13 18—8	SMUCマルセーユ（フランス）
パルチザン・ブジェロバール（ユーゴー）	2勝	32—14 24—16	スラスク・ウロクラウ（ポーランド）

予想通りのチームが準々決勝に進んだが、ホンブット・ブタペストがデュクラ・プラーグに先勝したのは特筆されよう。

▽女子準々決勝

シャルジリス・カウナス（ソビエト）	1勝1敗（得失点差）	10—14 23—12	ETVハンブルグ（西ドイツ）
エンポル・ロストク（東ドイツ）	2勝	10—7 14—6	SZオロムース（チェコ）
SKSクラコウ（ポーランド）	2勝	9—5 8—7	KSVスイフト・ロエルモン（オランダ）
ラピッド・ブカレスト（ルーマニア）	2勝	24—10 19—10	アドミラ・ウィーン（オーストリア）

準々決勝に先だち行なわれた第1回戦はクラコウがUSマルセーユ（フランス）に20—9、28—9で連勝した。

ルーマニア、チェコなど先勝

世界女子の欧州予選始まる

今秋11月16日から24日までソビエトのモスクワ、キエフ、レニングラードで開かれる第4回世界女子7人制選手権のヨーロッパ地区予選（5カード）は1月ストックフォルムのスウェーデン―ルーマニア戦を皮切りに開幕した。

各カードはそれぞれの国のホームグランドで1試合づつを行なう〝2回戦制〟で3月末までに勝者5ヶ国が決まり、それに前回優勝のハンガリー、開催国のソビエトアジア代表の日本、ヨーロッパで不戦勝の西ドイツの4ヶ国を加えた9ヶ国で本大会が開かれる。

現在までに伝えられた予選スコアは次の通り（何れも1回戦）

ルーマニア　10―9　スエーデン
チェコ　12―8　ノルウェー
ユーゴ　23―11　オランダ
ポーランド　11―8　デンマーク

日本　4たびアジア地区代表に

第7回世界男子7人制組合せ内定

ＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）からの公式通知はまだないが、一九七〇年フランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権大会の予選組み合せは別表のように決まり、日本は本誌51号既報の通りアジア大陸代表として、本大会直接出場が確定したようである。

予選は今冬12月から来春3月にかけてヨーロッパ各地でたがいのホームグランドで1試合づつを戦う〝2回戦方式〟で行われる予定だが、組み合せの承認と発表は8月アムステルダムで開かれるＩＨＦ年次総会になるものと見られる。

なお、今回の参加申しこみは28ケ国と史上最高。未参加国は韓国象牙海岸アラブ連合など15ヶ国である。

【解説】日本の関係者は『一大陸から一チームのみしか参加申しこみがない場合、そのチームは予選を免除される』という世界選手権開催規定が今回は適用されないのではないか、というみかたを強くしていた。

それは、ＩＨＦがこの大会の上位8ケ国に一九七二年（昭47）のミュンヘン・オリンピック出場権を与えたい意向があると伝えられ特殊な性質の世界選手権になる可能性が濃かったからだ。

それにいつもヨーロッパ・エリアの予選に出場するイスラエルが、強敵ぞろいのヨーロッパをさけて、今回あたりからアジアに転出してくるのではないかとも云われていた。

その二つの懸念が吹き飛び、日本は、4回連続してアジア大陸代表に承認されたようだ、幸運といってよいだろう。

イスラエルの実力は高くはないのだが今冬から来春にかけて東京エルサレムでそれぞれ予選を行わねばならず、11月の世界女子と重なって、正直のところ経済的な負担をどう処理するか難問題だった。「いろいろな意味でホッとした」という荒川理事長の言は本音だろう。

ところで、この幸運を真のものにするかどうかは、一九七〇年（昭45）にフランスで開かれる本大会までの2年間、いかに国内の強化を企てるかにかけられているあと2年ある、では手遅れだ。

現に〝開催国〟という特権で日本同よう予選を免除されたフランスは早くも今春からＡ・Ｂ二つのナショナルチームを発足させ、Ａは国内にとどまって外国チームと対戦。若手中心のＢは国外遠征に出て腕をみがいている。

地理的条件の異なる日本では望むべくもない強化策だが、少くとも〝フランス大会用候補選手〟は今夏中には決定し、2年後に備えるべきではないか。

ベスト・エイト突入という宿願を遂げるには、これまでのような〝その場主義〟では、とうていダメだ。

ラッキーなクジ運を活かすもころすも、球界あげての努力だとあえてつけ加えたい（Ｓ）

第7回世界男子7人制予選組合せ
（　）内は前回順位

【ヨーロッパ・エリア】

デンマーク（2位）	オランダ
ルーマニア（3位）	イスラエル
ソビエト（4位）	オーストリア
スウエーデン（5位）	フィンランド
西ドイツ（6位）	ポルトガル
ユーゴ（7位）	ブルガリア
ハンガリー（8位）	スペイン
ポーランド	ルクセンブルグ
東ドイツ	ベルギー

スイス・アイスランド・ノルウエー　リーグ戦（上位2国予選通過）

【アフリカ・エリア】
チュニジア―モロッコ

【アメリカ・エリア】
カナダ―アメリカ

【出場確定国】
▽前回優勝国　チエコ
▽開催国　フランス
▽アジア代表　日本

フランスの技術研究（8）

対人防御は重要な戦術

訳　藤本　強
（日本協会常務理事）

前回までは、ハンドボールという競技の中で、むしろ個人が前面にでる技術について、触れてきたが、今回以後はこの技術に基ずいて、複数の選手が行なうチームプレーいわゆる戦術について述べていくことにする。

一口に戦術というが、それは具体的にはどのようなものであろうか。戦術とはコーチもしくはキャプテン（チームリーダー）がそれぞれどのような形に試合を進めていくかの方針であると定義することができよう。

ハンドボールのように非常に動的なスポーツに於いては、形にはまったフォーメーションというのはすこぶる成立しにくい。むしろ基本的なフォーメーションのバリエーションが非常に重要になってくる。しかし、基本はあくまでも基本として、マスターしておかなければ、それからの変化というものもあり得ない。こうした基本的なフォーメーション、それからの変化、そのどれをそれぞれの情況に応じて、使っていくか、それが戦術なのである。

ただ戦術といっても漠然としてしまうが、ハンドボールでは、次の三つに分けて考えていくのが適当であろう。

イ、ボールを持っている場合……攻撃の戦術
ロ、ボールを持っていない場合……守備の戦術
ハ、ロの状態からイの状態に移り変った場合……反撃の戦術

イは動的なものであり、ロは静的なものである。ハの場合にはもつとも動的となろう。これは、その置かれた状況によって当然このようになるのであり、攻撃が能動的であれば、守備が受動的であり、攻撃の中でももっとも能動的なのが反撃であるからである。

以上の三つの場合では、全く異っているので、それぞれを独立させ、述べていく。

守備の戦術

一口に守備というが、ここには多くの形が考えられる。もちろん大きくわければ、対人防御と地域防御ということになるが、その中には多くの形とバリエーションがあり、一口には云えない多種多様の要素をもっている。

対人防御でも厳密な意味の対人防御、チエンジを伴うもの、浮いて当るもの、プレス気味に当り、相手を困らせるもの、ポイントゲッターを一人ないし、二人で徹底的にマークするものなどの方法がある。

守備は基本姿勢をとり、ゴールと相手の間に立ち、ボールをもっているものはその自由を奪い、ボールをもっていないものはボールをキャッチできないようにし、いつでもカットできるのがもっとも基本となる。これらをすべて完全にマスターしていなければならない。技術が個々の選手によってかなりのレベルに達っしていないことには、守備の戦術をいかに考えてもさほどの効果はあげられないのはいうまでもない。

対人防御

これは相手側の選手一人一人に防御側の選手が一人一人つくという防御戦術である。基本的には、一試合中同じ相手に当るのが、この戦術である。

この戦術をとる時には、早い動きの相手には、すばやく対応して動ける選手を、大きな相手には大きな選手をというように同形の選手をぶつけるようにするのがもっとも常道である。

このフォーメーションを使う際もっとも肝要なのはチーム全員が個人として、完全な防御技術を身につけていることである。

地域防御と異り、防御側の選手はボールによって、動くのではなく、ただ相手の動きにだけついて動くのである。

7人制ハンドボールの防御としては、従来対人防御は不向きであるとされていたが、ここ一、二年の傾向は一試合、一時間中対人防御をするチームも出てくるほど、対人防御は見直されている。

体力、技術が飛躍的に向上している昨今、対人防御のみで試合するチームも多くなろう。とにかく部分的にしろ対人防御をしたほうが有利という場面はしばしば見受けられる。そのためにも、かなりの時間をさいて、この練習をしておく必要がある。

対人防御を練習するということは個人個人の防御能力を知り適切な助言をし、個人の防御能力を高めるためにも大いに役だつであろう。

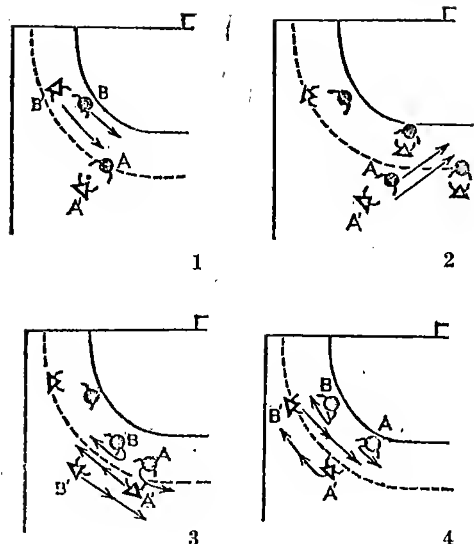
次のような場合には、対人防御がきわめて有利に展開すると思われる。

一、スタープレーヤーをマークする場合。スタープレーヤーをそのプレーヤーの形によって、それぞれ適したマークをつけて、その動きを封じる。ポイントゲッターをマークすることもあるが、チャンスメーカーをこの方法でマークしボールを渡さないようにするのも効果的な方法である。

二、相手のボールをカットし、反撃によって、大量点をあげようとする場合（退場などによって相手の数がへったとか、試合終了間際とかのように）……プレス・ディフェンスとしてこれを採用することは効果がある。

この時には、相手側にピッタリと寄りそわず、相手との間にやや距離をおき、必ず相手のボールに近い側に位置をする。云いかえるならば、インターセプトが、一番や

りやすい位置にいることである。
この守備戦術をとるのは非常に効果があるのは前に述べた通りであるが、次のような選手をチームの中にもっている場合には、とらないほうが良い。
十分に個人的技術のない選手、たとえあったとしても、相手側より劣っている人間がいる場合には味方にとって、不利になる。
また、一人もしくは二人の選手が、たとえボールから遠いといっても、それぞれの責任を十分に果さないような時にも危険である。体力的、気分的に一寸でもかける選手の場合には、気を抜くことがあるが、このような事があると、相手に易々と防御を破られ、得点を許してしまうことになる。



反撃を受けた場合、これをとると有効なことが多い。特に防御側の帰りが早く、攻撃側の数より勝っている場合には有効である。
一人が一人に当り、それに責任をもち、他の一人はカットに専念するようにすれば、たとえカットはできないでも、速攻をとめ、味方の帰陣が間に合うようにすることができる。これはそれぞれのチームの選手間での意志の疏通がすばやくなされることが必要となろう。
ポスト・プレーヤーに対してこの方法は非常な効果がある。ゴールエリアライン近くに入ってきているポストプレーヤーは防御側にとってきわめて危険な存在である。ここに好パスが一つ入れば、まず得点はまちがいのないところであろう。これをマークするのは対人防御が確実である。これに入るパスをインターセプトするなり、捕球を妨害するなりすることが主要な任務となる。この場合防御側の任務は困難となる。ボールと相手を常に心にとめ、カットしたり、キャッチを妨げたりしなければならないからである。
実際の対人防御は以下のようにして行なう。

イ、チェンジをしない方法

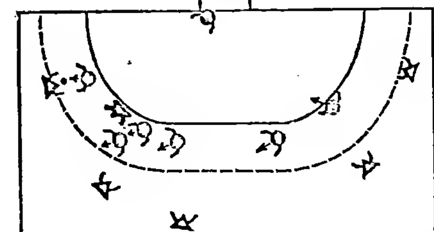
一番単純であるが、防御能力にすぐれた選手を揃えた場合には、強力な守備法になろう。徹頭徹尾フィールドプレーヤーは相手方の一人一人をマークする方法である。たとえ攻撃側がクロスしても、防御側はそのままのマークを続けていく方法である。
例、Aはボールを持っているA'に当っている。B'に当っているBはB'が中央に向って走りこめば、そのままB'について行き、防御を続ける（第1図）。
左サイドでやや浮いているA'に当っているAはA'がポストに向って走りこんでいくならば、そのままA'について、ついていく（第2図）。

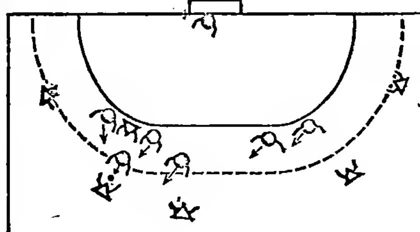
ロ、チェンジをする方法

クロスとブロックを多用する相手の場合には、直接に対人防御をする前の方法では、よほどの技術がない限り、不可能になる。このような場合には、防御側はそれぞれの相手をかえ、防御をする方法をとることがより良い方法となる。この場合、意志の疏通を欠くと、完全なノーマークができてしまうので、十分な練習が必要となる。どちらかが、すばやく指示をし、片方はそれを受け、さっと切りかえることが肝要である。
例、B'とA'がクロスする。BはB'は伴いスタートし、すぐにAにチェンジを指示し、A'に当る。Aはこの指示を受けB'に当る（第3図）。
A'とB'が深さが異っている場合にも同様、BはB'のスタートを見やや追い、A'の動きを見て、Aにチェンジを指示する（第4図）。
指示のしかたと互いの呼吸が重要な点になる。

ハ、しばしば実戦で用いられている。かなり地域防御的な面のこいものである。

各人が相手に当っているのは基本通りであるが、ボールをもっている選手に当っている者以外は、それぞれの相手からやや距離を置き、ボールのある点に集中して、防御に当る（第5図）。ボールが動いた場合には、すぐそれに対応するようにボールを持ったものに責任をもっている選手が攻撃側に当る（第6図）。相手がクロスする場合には、そのまま守るか、チェンジするかはあらかじめ決めておく。この方法になると、より多くのカットのチャンスが生れる。対人防御の要素が色濃く入ってきている防御法である。





連載（第2回）

ハンドボールの歩み　≪世界選手権編②≫

ルーマニアの初優勝

第2回女子7人制ハンドボール選手権大会

1962年7月8日～15日
於 ルーマニア

第1回女子7人制選手権が行なわれた後、女子の7人制の試合もようやく盛んとなり、各地で多くの試合が行なわれるようになってきた。

このような傾向を反映し、ヨーロッパ各国の選手権チーム同志で争われるヨーロッパカップも男子についで、1960年より行なわれ、女子7人制ハンドボールについての各界の関心もようやく、高まってきつつあった。

場所は東欧のルーマニア、前回呼び声は高かったが、惨敗を喫った同国は、その汚名をそそぐべく十分に準備を果し、この大会を開催することになった。

参加国は前回同様9ヶ国であった。前回優勝のチェコスロバキア、前回二位のハンガリー、三位ユーゴースラビア、四位ドイツ（ドイツと東ドイツの間で代表権獲得のための試合が二試合行なわれた。記録後掲）、五位デンマーク、それにポーランドと開催国ルーマニアと前回、今回と連続出場の7ヶ国、それに加えて、初登場の日本とソビエト連邦、以上九ヶ国の参加であった。前回六位のオーストリア、前回八位のスウェーデンは第2回選手権には不参加であった。

対戦の焦点は何といっても、第1回ヨーロッパカップ、第2回ヨーロッパカップに優勝、準優勝チームを出している東欧諸国であった。中でも前回優勝のチェコスロバキアは61年ヨーロッパカップ準優勝、62年ヨーロッパカップ優勝とヨーロッパカップでも最優秀の成績を納めており、優勝にもっとも近いと考えられていた。これに迫るのが、ユーゴースラビア、ハンガリーで、開催国ルーマニアはめっきり力をつけたとは云え、前回の不首尾がひびいてか、優勝最短とは云えず。また初登場の日本、ソ連がどのように戦うかも興味の的になっていた。

この大会に日本女子チームが初参加しているのは特筆すべき事柄であろう。この年日本は当時女子球界ナンバーワン愛知紡チームを主体とし、レナウン、大崎電気、大洋デパートから15人の選手を選抜し、ナショナルチームを編成して、大会に臨んだ。

大会前、ヨーロッパ大陸のみでなく、国際試合は初めてという女子チームのために、ドイツ各地を転戦し、ルーマニアに入った。この転戦で日本チームは多くのものを学び、大会に出場したのであるが、何分初めての国外試合、馴れないことも多く、残念ながら、もてる力を十分に出しきることなく最下位におわった。


決勝戦入場式

大会は第1回と同様9チームの参加であったので、世界選手権規定によって、三グループに分け、予選リーグがまず行なわれた。

Aグループはプロエスティでソビエト連邦、チェコスロバキア、ドイツが試合を行なうことになった。このグループではチェコがもっとも有望視され、初参加のソビエト連邦がチェコにどうからむかがこのグループの見どころということであった。ドイツはこの両国に比べるとやや力が落ちると見るのが常識的見方であった。

Bグループはデンマーク、ハンガリー、日本の三ヶ国でクロンスタットに於いて争うことになっていて、日本はきわめて困難な試合が予想された。前回二位のハンガリーが1位になりそうというのが

大方の予想であった。

Cグループはユーゴースラビア、ルーマニア、ポーランドの三国がブカレストで争うことになっていたが、ユーゴーとルーマニアの争というのが予想であった。

▼Aグループ

ソ連 11—8 ドイツ

ドイツ 7—7 チェコ（引き分け）

チェコ 16—5 ドイツ

①チェコ、②ソ連、③ドイツ

▼Bグループ

ハンガリー 17—8 日本

デンマーク 8—4 ハンガリー

デンマーク 12—7 日本

①デンマーク、②ハンガリー、③日本

▼Cグループ

ルーマニア 9—4 ポーランド

ユーゴー 5—2 ポーランド

ルーマニア 3—3 ユーゴー（引き分け）

①ルーマニア（得点差+5）、②ユーゴー（得点差+3）、③ポーランド

Aグループでは、チェコが意外にドイツにてこずり、前途に暗影を感じさせながらも、準決勝リーグに進んだ。Bグループの日本は残念ながら準決勝リーグに進出できないでおわった。

Cグループは予想通り激戦になったが、僅かにポーランド戦で点差を開いたルーマニアが1位になり、準決勝リーグに進んだ。

各グループの最下位チームによって、7位決定リーグが行なわれ日本はこれに出場。

▼7位決定リーグ、

ポーランド 16（7—5、9—5）10 日本

ドイツ 15（7—1、8—5）6 日本

ポーランド 5（3—3、2—1）4 ドイツ

7位 ポーランド、8位 ドイツ 9位 日本

日本は7位決定リーグでも、全敗し、9位に甘じた。

▼準決勝リーグ

▽第1グループ

ルーマニア 9（4—4、5—3）7 ハンガリー

チェコ 6（4—3、2—1）4 ハンガリー

ルーマニア 7（3—1、4—2）3 チェコ

いずれの試合も激戦であったが、地元の利でルーマニア1位となった。

▽第2グループ

ユーゴー 10（3—2、7—4）6 ソ連

デンマーク 10（6—1、4—3）4 ソ連

デンマーク 7（3—4、4—1）5 ユーゴー

第2グループはユーゴーがでるのではないかと考えられていたが、前回の不成績をとりもどすかのようにデンマークがはりきり、ユーゴーを押え、1位となった。ユーゴーが決勝に出るとやりにくかったルーマニアもこれでやりやすくなった。

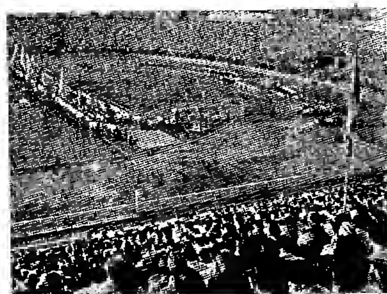
▽決勝戦

ルーマニア 8（5—2、3—3）5 デンマーク

決勝戦はルーマニア—デンマークという組み合せになり、ルーマニアが前半のリードを保って、優勝した、これでルーマニアは、男女7人制のタイトルを一人占めするとともに、11人制の女子優勝、男子準優勝という輝やかしい記録を打ちたてるに至った。ルーマニアの勝利は技というよりも、力の勝利と云うことができよう。

▼3位決定戦

チェコ 6（5—2、1—3）5 ユーゴー



ルーマニア—デンマーク

残念ながら決勝に出られなかったチーム同士の争い、どちらも優勝候補にあがっていながら、今一歩の所で決勝にでそこなったチーム。激戦であったが、チェコが僅かに勝運に恵まれ、3位となり、辛じて面目を保った。

▽5位決定戦

ハンガリー 12—10 ソ連

この試合前後半のスコア不詳、延長戦の後、ハンガリーがソ連を敗っている。期待されたソ連も、僅かにドイツに勝っただけ、国際経験の乏しさがこのような結果におわらせたのであろう。

最終順位 一位ルーマニア、二位デンマーク、三位チェコスロバキア、四位ユーゴースラビア、五位ハンガリー、六位ソビエト連邦七位ポーランド、八位ドイツ、九位日本。

優勝メンバー

ヘクトル
ボタン
オテレア
コンスタンチネスク
ステハネスク
レオンテ
ヘデシウ
ドウミトレスク
ネアス

国内予選東ドイツ4—2西ドイツ（於ウイーン）、西ドイツ10—6東ドイツ（ワルシャワ）得点差で西ドイツが代表

〔関連記事は本誌10号、11号に掲載してある。〕

球界パトロール

職場への進出に積極的対策を

職場スポーツの実態調査から

○…財団法人スポーツ振興資金財団では、職場におけるスポーツの実態をさぐるため全国七百五十の事業所を無差別に抽出してその調査を行い、二百五十の回答を得て2月20日東京でその結果を発表した。

それによると、職場にもっとも多く設置されている運動部は野球部（硬・軟式）で回答数の95・6%を占め、卓球部91・1%、テニス部（硬・軟式）85・6%がベスト・スリー。つづいてバレーボール・釣・登山（山岳）、バスケットボールとなっている。

○…ハンドボール部の設置率は5・1%で26番目という数字が出た。

球界内の反響は、実業団の充実などがあるにもかかわらず意外に低率というみかたもあるが、3年前にこのような調査が行われていたら、おそらく5%にも満たなかっただろう―今後に目標がたてられはげみになったという声の方が強い。

設置率の上位を占めた種目はレクリエーション的要素が強いものばかりで、ハンドボールは昭和初期に社会体育として高い評価をうけた実績があり、この面での伸びには今後大いに期待がかけられ日本協会普及部の新課題として今後の研究と積極的な対策が望まれよう。

○…今回の調査でむしろハンドボール界が考えなければならないのは、職場においてどのようなスポーツ又はレクリェーション活動が愛好されているかという実態結果でハンドボールをあげたものが10%に達しなかった〝事実〟であろう。

愛好種目のベスト・フォアは卓球、野球、バレーボール、テニスの順で、設置運動部の上位4種目と同種目だが、以下愛好率10%をこえる17位までの間に主要競技の名がほとんどあげられたにもかかわらずハンドボールがもれたことは、一般社会へのPRがいかに不足しているかを示すものである。

○…愛好率が高いということは競技人口はもとより〝観戦人口〟などすべての面で豊かな数字を示すことになるわけで、競技そのものの消長を左右する大きな要素だ。

大学以下高校、中学校などへの普及は近年いちじるしいものがあるが、今後は、こうしたデーターを基にハンドボールの「職場進出」が真けんに考えられてよい。

実業団連盟あたりも、競技する会社チームの育成だけにとらわれず、ハンドボールをいかにして職場に浸透させるか、といったテーマを考えてみてはどうだろう。

（X）

積極的な国際交流要望

外国コーチの招へいも検討

技術委

日本協会技術委員会（委員長・中沢常務理事）は、43年度以降の強化対策についての試案と、43年度ナショナルチームの編成について、次のような基本線を申しあわせた。

まず、43年度以降の強化対策としては、トップレベルの向上のため積極的な国際交流を行うようにし、ヨーロッパの一流クラブチームを全日本選抜（12月）に招待出場させるといったような新しい企画の推進と、ナショナルチームが来日した場合は、日本ナショナルとの滞同ゲームを多くした日程編成にすることを関係筋に要望することになった。

また、43年度にソビエト、44年度にフランス、チェコ、ルーマニアの何れか一ヶ国の男女ナショナルチームの招待実現と、44年度に全日本男女のソビエト遠征が提案されたが、その後、日本協会は43年度は全日本女子がソビエトの世界女子7人制選手権に出場するため、国際試合を行わないことに決めており、この技術委のプランは全面的に白紙に戻った。

ただし、日本協会としては44年度中にソビエト男女ナショナルの招待を実現することに内定している。

このほか、韓国、中共との交流再開を望む声が強く、でき得れば44年又は45年度に3ヶ国対抗あるいはジュニア・ナショナルを編成して両国に遠征させる計画を検討することになった。両国との交流は相手側の国内事情のため途だえているもので、日本側の希望だけで軌道にのらない点が難しい。

懸案の外国コーチ（ルーマニアあたり）招へい問題は、オリンピック出場を果すためには不可欠な条件であることが技術委メンバーの中では再確認され、日本協会と話しあうことになった。

ナショナルチームについては、43年度メンバーのうち女子は既発表の第4回世界女子7人制選手権代表団14名（GK2、FP12）をそのまま当てはめることとし、男子については、遅くとも4月中に発表する予定。

なお、ナショナルチーム選手選考基準（案）は別表のようなもので、43年度男子はコーチング・スタッフ2～3名、選手25名をリスト・アップし、将来はジュニア・ナショナル（男女）も選ぶ。

―ナショナルチーム選手選考基準案

1. 肉体的条件
（イ）基礎体力・ゲームスタミナに秀れている。
（ロ）特に走力・フットワークがよく爆発的な力を持っている。
（ハ）体格に恵れ将来性のあること。

2. 技術的条件
（ニ）試合経験（国際国内試合）が豊かでハンドボールをよく知り勝負強いこと。
（ホ）ボールの保持能力が秀れている。
（ヘ）強烈なシュート力を含め基礎技術に秀れている。
（ト）攻撃・防禦ともに組織的な活動に秀れている。
（チ）リードオフマン又はアシスト的プレーに秀れている。

3. 精神的条件
（リ）責任感が強く「根性」ある選手（責任感）
（ヌ）チームワークをとっていける選手（協同）
（ル）スポーツマンシップに秀れコートマナーのよい選手（公明）
（ヲ）判断力に富んでいること（判断力）

4. 日本の代表選手として国際試合に立派に活躍出来ること

新たに審判部を設置

全日本実業団連盟理事会

全日本実業団連盟では2月11日大阪で常務理事・理事会を開き新理事長に浜田猪三郎氏（立教大出・日本協会常務理事）を選出＝先号既報＝。来年以後の全日本実業団選手権の日程などを協議。その結果44年の第9回大会は横浜市で45年の第10回大会は名古屋市で開くことを決めた。

また実連内に審判部を設け実業団各チームのOB、OGが〝実連審判員〟（ABCDの4階級）の資格をとり、全日本実業団選手権地域実業団選手権などを運営する方法を検討することにした。

このほか、2月の第8回全日本実業団選手権（男子）で静岡日野自動車（静岡）、本田技研（三重）が棄権したことは、大会の運営に重大な支障をきたしたという理由で、両チームから事情を聴取したうえで、なんらかの処置を理事長が課すことになった。

新執行陣については浜田理事長を中心にして3月中に人選を行い、3月末または4月上旬に伊東で初会合を開く予定。

なお、浜田新理事長の選出によって渡辺和美氏は副会長となり、小杉仁造、須崎潔両常務理事は辞任した。

渡辺（田村紡）ら11人を表彰

全日本実業団連盟では、実業団で5年以上つづけてプレーした女子選手11名を特別表彰することになり、2月11日熊本での第8回全日本実業団選手権閉会式でトロフィを贈った。表彰をうけた選手は次のみなさん。

渡辺美智子、種村好子、渡辺好子、水谷秀子、清水一子（以上田村紡）、新保郁子、枝尾清女（以上大洋デパート）、川崎幸子、早川清美、鈴木功子（以上大崎電気）、小林トメ（愛知紡）

関東協会の日程決まる

関東協会は43年度の事業日程を次のように決めた。

▽第20回全日本総合関東予選（6月23又は30日・場所未定）
▽第14回関東高校選手権（8月11日～14日・群馬県富岡市）
▽第15回関東選手権（兼一般国体関東予選）及び高校、教員国体関東予選会（8月23～24日、東京駒沢）
▽第3回関東実業団選手権（未定）

学園だより

先輩

寝屋川高（大阪）

わがハンドボール部は、数多くの優秀な先輩を持っています。木野さん、北村さん、大西さんは世界ハンドボール選手権大会に出場されましたし、大学で、主将をしている先輩もおられます。そして、先輩の方々は、たえず研究心に燃えて、がんばっておられ、また、よく寝屋川高校に来て、ぼくたちを指導してくださいます。ぼくたちは、そういう先輩を、尊敬せずにはいられませんし、誇りに思っています。

しかし、ぼくは、あまり伝統ばかりにとらわれず、現在のハンドボール部として、がんばっていきたいと思います。特にこのごろは大学入試のため、勉強とクラブの両立の問題など、いろいろな問題があります。そして、ぼくはそういう中で、ハンドボールに打込んでみたいのです。今の部員全員で勝利を味わいたいのです。そのために、われらの先輩を、利用さしてもらおうと思っています。

（主将　岡市協生）



寝屋川高

負けている時こそ声を

名城大附高（愛知）

我が名城大学附属高等学校ハンドボール部は、昭和38年度に創立され、それから五年目で伝統は、あまり無いが、全国大会へ出場しても、はずかしくないような成績を上げられるようなチームになった。それというのも諸先輩の努力の賜であると思う。

ハンドボール部が出来た当時は運動場が狭いので週に日を決めて他のクラブと交代で運動場を使用して練習を行い、それが使用できない時は、うさぎ飛びや歩腹など基礎を行い、授業後に練習できない分を朝早くから学校へ来て練習したと言う話を小川監督からよく聞く。その点、現在は、毎日グクウンドが使用でき、部員の数も多くなって練習もしやすくなった。

しかし、今のチームは、あまやかされているせいか、根性が無くなったと思う。試合中に勝っている時は、声を出して、負けている時は、シュンとしまう。このようなことでは、本当に「根性がある」「気力がある」とは言われない。負けている時こそ声を出して頑張ることの出来るチームになることを目標にして、一日一日を大切にして練習に、励んでいます。

初めての全国大会

境　港　工（鳥取）

私達ハンドボール部は一年半前は結成されたまだほやほやの新チームです。始めのころ学校のグランドの片すみでボールもゴムのボールでゴールも木のわくだけで後にバックネットを置いて毎日練習しました。私達の兄チームである境高へ一週間に一回練習を教えてもらいに行きます。境高は私達を良く指導し又模範を見せてくれますし、しかし練習はきびしく〝根性〟を育てているみたいです。そして中国大会予選で二位になり、とうとう晴れの舞台がきました。広島へ行き初めて県外チームと試合をし、みごとに大差で負け練習に対するあまさがまだまだあり、こんな〝根性〟ではいけないと思いました。そして、それから練習にはきびしさが一段とでました。全国予選で境高に7—6と1点差で勝ち、この時私達は、喜んでいいのかかなしんでいいのかわかりませんでした。そして全国大会の会場である和歌山へ行きスピードに富んだダイナミックな試合で苦い経験をしました。そしてどうしてもやるんだと思い県の体育大会で優勝しました。私は一人一人がほんとうのやる気をおこせば大きな力となってチームを作っていくのだと思います。

先輩のこと

白梅学園（東京）

現在部員数は二十余名このクラブが成立してから今年で三年目という本当に若くて未熟なクラブである。そのクラブを良くする為に先輩達は、努力に努力を重ね今日のような良きクラブを作ってくれました。毎日の練習でも私達と同様に動き、走りまくり、そして、あれこれと御指導してくださいました。そんな中で先輩達は、技術的な面でもチームワークを他から見ても、おかしくないように作り上げて下さいました。それだけに練習に於てもやりやすかったと思います。練習ば

今年から女子も東西対抗

全日本学連で決める

全日本学生連盟総合役員会は3月29日東京・体協会議室に西会長安藤理事長はじめ全国各学連の代表者を集めて開かれた。

42年度決算など本部報告事項を承認のあと一般議題に入り、重点施策として女子部門の強化と普及の推進を決めた。女子チームは現在全国で8校（関東5、東海3）が活動しているだけだが、これを全国的に広げさせようというもの。

レベルアップの一策としては、今年度から東西対抗を行うことになった。期日は男子の東西対抗と同時で（注・今年は9月15日愛知県体育館）、東西の区別は次回の会議で決められるが、それまでに関西以西にチームが設立されない場合は、関東—東海選抜対抗戦にする予定。

また、懸案の全日本学生王座決定戦存廃問題については、各学連から、それぞれの意向を聞いたにとどまり、結論は次回まで持ちこされた。

次回の全国総合役員会は7月、全日本学生選手権開催時に松山市で開く。



白 梅 学 園

かりではなく、レクリエーションの面に於ても私達と同様に騒いだり、楽しんだりし、今だに数多くの思い出となって残っています。そしてこの良き先輩達が作り上げたこのクラブを、私達がより以上に発展させるよう努力しています。そして今日も、〝ダッシュ！ストップ！ターン！〟の掛声と共に頑張っています。

ハンドボール部の歴史

徳山高（女）（山口）

我が徳高ハンドボール部は、過去国体出場7回、インタハイ連続出場9回という輝やかしい伝統と歴史を誇っています。伝統とは、昨日の友から今日の我々の胸に、直接に吹き込まれる日々の新しい息吹きなのです。事実我々が意識すると否にかかわらず先輩の覇気は、グランドに汗を流す我々に無言の激励を与えてくれているのです。私たちには、先輩から継承したすばらしいものが沢山ある。しかしながらその大事なものをどんどん捨てていくような風潮がたまらない……。たとえば、礼節とか克己心とかが少しづつ失われていくのを見ていて私は悲しい。尤も半分は、時代錯誤であると思う。しかしそれに甘えていたのでは、進歩・発展のない惰性的な人間になってしまう。そこであらゆるスポーツの根本である全力的精神でもって栄冠を獲得しようと今年も徳高ハンドボール部は歴史の一ページをより深長な意義あるものにするためにインタハイ・国体を目標にして部員一同猛烈なファイトで毎日の厳しい練習に励んでいます（藤村照子）

ハンドボール部の歴史

小松市女（石川）

汗と涙と感激この言葉がハンドボール部創立の時のスローガンです。40年2月に谷口・源戸両顧問と14人の部員でスタートしたのが私達チームの歴史の始まりです。2月創立以来インターハイ出場を悲願として、1日の休日もなしの猛練習が続き、チーム創立2ヶ月で県大会優勝、その年のインターハイ（熊本）は1回戦で惜敗したものの、秋の北信越五県では準優勝に輝き、昨年は北陸三県優勝、インターハイ3回戦進出、国体予選はレギュラーの負傷から涙をのんだが、今年こそ3年目に、私達の夢は大きく拡大しています。創立時代の先輩の苦労は言葉で語ることは出来ません。涙も汗も渇き上った猛練習は、今はなつかしい想い出ですが、やはり胸をさすものがあります。顧問の先生の指導は一切の私情も許されずチームワークが常に先行する指導でしたが、しかしそれ以上に学習・生活面に監督の目が厳格であったことを、いや現在もそうですが、それが今日迄のクラブの歴史を支えているものと信じています。（主将・酒谷他恵子）

さらに努力を

柏崎工（新潟）

我々柏崎工業ハンドボール部はまだ歴史も浅いが、この三年間全ロ大会出場を果たし健斗している。この伝統を守るために後に続く我々が頑張らなくてはならない。今年の練習目標を綴りながら我々の考えを話す事にする。気候的に見ても短時間で最大の効果、能率を上げ心身共に立派なスポーツマンとして全国大会に挑戦したいと思っている。そのためにも第一に「走る」ことである。スピードをつけ耐久力をつける事、足腰を強くし下半身のバネをつける事、第二に「チームワーク」である。部員一致団結し苦しみを乗り越え勝利への喜びを得るためにも多くの苦しみに耐え、その苦しみを乗り越え得た喜びは我々の味であり楽しみともなるものである。それがスポーツマンでありスポーツの使命であると思っている。技術・根性・チーワークこの三本の柱を軸として全国大会をめざし毎日の練習に汗を流している。先輩の踏んだ土を我々の手でもう一度踏むのだ。

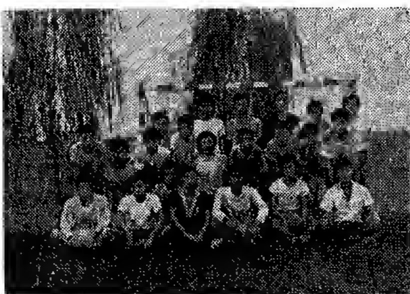
そして上位入賞をめざし、今日も練習に励んでいる。

（主将・与口勉）

我がクラブ

府　中　工（東京）

我、ハンドボール部は部員21名で形成され、一言で、若い、さあこれからだと言う闘志がわいてくるようなクラブです。我々21名、毎日の生活の中にクラブをとけこませ、一日、一日を大切にがんばってきました。そのがんばりの裏には楽しい事、苦しい事いろいろな事がありました。しかしそれらはすべて思い出となるのです。この思い出こそクラブの魅力だと思います。我々の試合は中途半端が多い、つまり真の実力が出せず、相手のペースにまきこまれるケースが多い、なにかここに我々のクラブの一本ぬけたところがある。勝敗は別として、すべての試合に十分クラブのもつ実力を発揮すると言う事を、皆心から願っています。しかし実力を発揮できないのは、我クラブはまだまだ未熟だと言う事です。そして、ハンドボールを通じて、いろいろな事を学ばなくてはなりません。練習もまだ足りないし、クラブの力も十分ついていません。我々、「これからやるぞ」と皆、心の中で誓っています。



府 中 工 高

日本ハンドボール界規程集

最近、編集部に、協会規約に関する質問が多い。そこで日本ハンドボール協会をはじめ、加盟3団体の現行規約並びに会則を掲載することにした。なお、機会を見て国際ハンドボール連盟（IHF）規約、世界選手権規約など国際関係の規程も掲載する予定である。（各規約は昭和43年3月現在＝機関創立年順に掲載）

日本ハンドボール協会規約

第1章　総　則

第1条　名称
本会は日本ハンドボール協会という。

第2条　事務所
本会は事務所を東京都渋谷区神南町25番地、岸記念体育会館内におく。

第3条　組織
本会は各都道府県及び沖縄においてハンドボール競技を統轄代表する協会で組織する。

第4条　目的
本会は日本におけるハンドボール競技団体を統轄代表し、ハンドボール競技を振興して国民体育の向上とスポーツ精神の涵養を図ることを目的とする。

第5条　事業
本会は前条の目的を達成するため事業を行なう
一、全国的な競技会の開催
二、国際競技会の開催及び代表選手団の派遣
三、競技規則の制定及びその実施。
四、競技の技術の指導、研究及び普及に関する事業
五、用具及び施設の研究拡充
六、会誌その他必要な刊行物の発行。
七、その他本会の目的達成に必要な事業。

第2章　機　関

第6条　機関
本会には次の機関をおく
一、評議員会
二、理事会
三、常務理事会
四、専門委員会

第7条　評議員会
1　評議員会は評議員で構成し本会の最高議決機関として基本方針を定める。
2　評議員会は定期評議員会と臨時評議員会とする。定期評議員会は毎年1回2月中に開催することを原則とし、臨時評議員会を評議員の5分の1以上の要求があった場合又は理事会の議決があった場合開催する。
3　評議員会は過半数の出席をもって成立し、議事は出席者の過半数の同意を経て決定する。但し、可否同数の場合は議長がこれを決定する。
4　評議員は文書をもって他の評議員に権限を委任することができる。

第8条　評議員会の権限
1、評議員会は本会の会長、副会長、監事を選出する。
2、次の事項は評議員会の議決を得なければならない。
一、規約の変更
二、顧問、参与、理事の委嘱及び日本体育協会への派遣役員の承認
三、収支予算、事業計画及び資金計画
四、収支決算、事業報告
五、その他の重要な事項
前項1号の議決は第7条第3項の規定にかかわらず評議員の現在数の2分の1以上の同意を得なければならない。

第9条　理事会
1、理事会は理事で構成し、評議員会の定めた基本方針にもとづいて運営計画をたてるとともにその執行にあたる。
2、理事会は過半数の出席をもって成立し、議事は出席者の過半数の同意を経て決定する。ただし、可否同数の場合は議長がこれを決定する。

第10条　理事会の権限
理事会は、第8条第2項に関する案件を審議するほか次の事項を議決する。
一、本規約の施行を確保するための規程の制定
二、理事長及び常務理事の互選
三、本会の運営計画の執行に関すること。

第11条　常務理事会
常務理事会は理事長及び常務理事で構成し、常時本会の運営にあたる。

第12条　常務理事会の権限
1、常務理事会は理事会、評議員会に提出する案件の作成にあたる。
2、常務理事会は第10条三号の規定にかかわらず本会運営の緊急事項に関し、処理することができる。ただし、処理後のはじめての理事会で承認を得なければならない。

第13条　専門委員会
専門委員会は担当理事及び専門委員で構成し、専門事項に関し常務理事会に提出する案件を作成する。

第3章　役　員

第14条　役員
1　本会には次の役員を置く。
一、評議員　若干名
二、会　長　1　名
三、副会長　若干名
四、顧　問　若干名
五、参　与　若干名
六、理事長　1　名
七、常務理事　10名以内
八、理　事　26名以内
ただし会長、副会長を含まず
九、監　事　3　名
十、専門委員　若干名
十一、海外駐在代表　若干名
2　役員の任期は2年間とし再任をさまたげない。

第15条　評議員
1、評議員は各都道府県及び沖縄協会の会長、全日本実業団ハンドボール連盟会長、全日本学生ハンドボール連盟会長及び全国高等学校体育連盟ハンドボール部長がこれに当る。
2、評議員は、副会長または副部長（高体連）を評議員会に代

理出席せしめることができる。
ただし、本会役員をこれにあてることは出来ない。

第16条　会長及び副会長

1、会長は本会を代表し会務を総理するとともに理事会、評議員会を招集し、その議長となる

2、副会長は会長を補佐し、会長が事故あるときはその職務を代行する。

3、会長、副会長は理事となる

第17条　理事

1、理事は次の団体で推せんし評議員会の議決を経て会長が委嘱する。

一、第26条の規定による地区連盟　10名

二、第25条の規定による全国連盟　6名

2、会長は前項の外、前項第1号にかかげる理事数を越えない範囲で評議員会の承認を得て理事を委嘱することができる。

3、理事は、理事会を構成するとともに会長の指示を受けて会務の処理にあたる。

4、常務理事は会務を常時分掌処理する。

5、理事長は会務の処理を統括する。

第18条　監事

監事は毎年度本会の決算を監査し、その結果及び意見を評議員会に報告するものとする。

第19条　専問委員および海外駐在代表

専問委員および海外駐在代表は常務理事会が推せんして会長が委嘱するものとする。

第20条　顧問及び参与

1、顧問及び参与は本会の功労者または協力者の中から理事会が推せんし、評議員会の承認を経て、会長が委嘱する。

2、顧問及び参与は評議員会に出席して意見を述べることができる。

第4章　会　計

第21条　経費

本会の経費は次のものをもって当てる。

一、各都道府県及び沖縄協会の加盟金

二、登録金

三、大会参加料

四、用具検定料

五、審判審査料

六、競技規則頒布料

七、補助金

八、寄付金

九、その他の収入

第22条　特別会計

本会が行なう特別な事業については、特別会計とすることができる。

第23条　保管

本会の資産は会長が保管する。

第24条　会計年度

本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日で終る

第5章　加盟団体

第25条　全国連盟

本会は全日本実業団ハンドボール連盟、全日本学生ハンドボール連盟及び全国高等学校体育連盟ハンドボール部等全国的ハンドボール団体について評議員会の議決を経て加盟団体とすることができる。

第26条　地区連盟

本会は各都道府県協会及び沖縄協会の地方的運営を円滑にするため評議員会の議決を経て、地方別に地区連盟をおくことができる。

第6章　雑　則

第27条　職員

本会は事務処理のため職員をおくことができる。

附則1　本規約は昭和40年11月9日から実施に移するものとする。

(注)　日本ハンドドール協会には次の諸規定がある。
「日本ハンドボール協会アマチュア規定(合旅費規定)」「同徴罰規定」「同公認審判員規定」「同登録規定(要領)」「同地区連盟規定」。
また各全日本選手権の開催については、そのどつ「大会参加要領」が発表されることになっている。

全日本学生ハンドボール連盟規約

第1章　総　則

第1条　本連盟は全日本学生ハンドボール連盟と称する。

第2条　本連盟は日本各地区の学生ハンドボール連盟により組織され、運営上東日本学生連盟と、西日本学生連盟を置く。

第2章　目的と事業

第3条　本連盟は日本各地の学生ハンドボール団体の総合機関として学生スポーツ精神を通じ学生ハンドボールの普及と発展を目的とする。

第4条　本連盟は前条の目的を達成するため左の事業を行う。

一、競技会の開催

一、学生ハンドボールに関する調査と研究

一、学生ハンドボールの指導奨励

一、その他、本連盟の目的達成に必要な事項

第3章　役　員

第5条　本連盟に左記の役員を置く

一、会　長　一　名

一、副会長　若干名

一、顧　問　若干名

一、理事長　一　名

一、副理事長　若干名

一、理　事　若干名

一、委員長　一　名

一、副委員長　若干名

一、委　員　若干名

第6条　会長は総合役員会において推選し、本連盟に関する一切の事柄について統括し、本連盟を代表する。

第7条　副会長は総合役員会により推選され、会長がこれを委嘱し、会長事故あるときはその職務を代行する。

第8条　理事長は理事会により選出され、会長の指示を受け会務を総理する。

第9条　副理事長は理事長がこれを指名し、理事会の承認を得、理事長を補佐し、理事長事故あるときはその職務を代行する。

第10条　委員長、副委員長は委員の互選による。

第11条　理事、委員は各地区連盟より各一名を選出する外、地区連盟において加盟校5校に対し各理事、委員一名づつを選出する。

第12条　理事は本連盟加盟校の出身者で、委員は本連盟加盟校の学生でなくてはならない。

第13条　本連盟の役員の任期は一ケ年とし再選を妨げない。

第4章 会 議

第14条 本連盟に左の会議を置く
一、総合役員会
一、理事会
一、委員会

第15条 総合役員会は各地区連盟から選出された理事及委員をもって構成し、本連盟の決議機関とする。

第16条 総合役員会は毎年2回定期に、必要ある時は臨時に会長が招集する。

第17条 理事会は全理事をもって構成し、本連盟の執行機関とし理事長が招集する。

第18条 委員会は全委員をもって構成し、総合役員会、理事会の議決にもとずき本連盟の運営にあたり委員長が招集する。

第19条 本連盟の会議を招集するときは少なくとも会議の日より15日前に議題、日時、場所を各役員に通知しなければならない
ただし、緊急の場合はこの限りではない。

第20条 本連盟の会議に理由なく欠席した役員は白紙委任状を提出したものとみなす。
ただし、代理出席又は書面出席にかえることができる。

第21条 会議は出席者の過半数をもって決する。

第5章 登 録

第22条 本連盟の加盟校は各年度の定められた期日までに登録しなければならない。ただし、特別の事情あるときは総合役員会の承認を得て期日後の登録を認める。

第23条 登録のない学校、選手は本連盟の競技会に参加出来ない

第24条 登録は同一学部につき4回（入学時から4ケ年間のみ）まで認められる。ただし、同一学部4回のみで、例え回数が残っていても、転校による再登録は認めない。医学部学生については6ケ年を適応する。

第6章 会 計

第25条 本連盟の経費は次の収入をもって当る。
一、加盟金（登録金）
一、寄附金
一、その他の収入

第26条 本連盟の加盟金（登録金）は総合役員会において決する。

第27条 本連盟の資産は会計が保管する。

第28条 本連盟の予算は総合役員会において決定され、会計は総合役員会において決算報告とその承認を得なければならない。

第29条 本連盟の会計年度は毎年1月1日に始まり同年12月31日をもって終了する。

第7章 事務局

第30条 理事長は理事、委員、その他の者をもって事務局を構成し、本連盟の事務執行の責任を負う。

第31条 本連盟の事務局を日本体育協会内に置く。

第8章 附 則

第32条 本連盟の名誉を毀損し、または本連盟の規約及び決定にしたがわない加盟校または地区連盟は総合役員会の議決により試合出場停止または除名に附せられる。

第33条 本規約改正及び附加は総合役員会の議決によらなければならない。

第34条 本規約は昭和39年12月1日より施行する。

会長並びに委員長選出の協定

第1項 事務局所在地との関連において本連盟の円滑な運営を図るため会長は関東学生ハンドボール連盟会長を、委員長は関東学生ハンドボール連盟委員長をあてるものとする（注・理事長は第8条による）
なお、関東学生ハンドボール連盟会長、同委員長が交代した時は処理後はじめての総合役員会で承認をうけるものとする。

第2項 前項の協定は恒久的な効力をもつものでなく、総合役員会でいつでも改廃できる。

昭和43年度登録要領決まる

日本協会は昭和43年度（43年4月―44年3月）のチーム登録要領を決め発表した。

チーム登録に必要な登録料金は別表のとおり前年度額そのままにすえおかれた。

チーム登録（一般は個人登録も）は、所定用紙に必要事項を記入し各都道府県協会が定める日までに各都道府県協会あて提出されなければならない。

各都道府県協会はそれをまとめ5月31日までに地方協会長の承認印を捺して日本ハンドボール協会（東京都渋谷区神南町25・岸記念会館内）に届出なければならない。

登録〆切日をすぎたあとの受けつけは行われず、未登録の場合は日本ハンドボール協会の主催する公式競技と国体に参加できなくなる。

なお、新設チームの登録についてはこの限りではない（受付〆切日無期限）

一般の個人登録は6月1日以降も規定の追加料を納入すれば受けつけられる。

全日本学生連盟、全日本実業団連盟加盟チームはこのほかに各連盟への登録料が必要である。

43年度登録金（円）

	基本金	機関誌（年11回）	オリンピック基金	その他	計
一般	一、〇〇〇	一、二〇〇	一〇〇	人員×一〇〇	二、三〇〇＋（人員×一〇〇）
大学	一、〇〇〇	一、二〇〇	一〇〇		二、三〇〇
高校	六〇〇	一、二〇〇	一〇〇		一、九〇〇

（注）一般の個人追加登録料は一人につき500円

全国高等学校体育連盟 ハンドボール部会々則

第1章 名称及び事務所

第1条 本部会は全国高等学校体育連盟ハンドボール部会と称する

第2条 本部会の事務所を部長在任の学校におく。

第2章 目　的

第3条 本部会は高等学校におけるハンドボールの健全な発達を図ることを目的とする。

第3章 事　業

第4条 本部会は第3条の目的を達成するために左の事業を行う

一、高等学校におけるハンドボールに関する審議会の開催。

二、全国高等学校ハンドボールの全国的大会の開催に関する事項の審議決定。

三、機関誌の発刊。

四、其他目的達成に必要な事項

第4章 組　織

第5条 本部会は全国高等学校体育連盟規約第6条によって組織される。

【編集部注・全国高体連規約第6条=本連盟に競技種目別の専門部をおく。その細則は別にこれを定める】

第6条 本部会は全国の都道府県高等学校体育連盟のハンドボール部会によって組織する。

第5章 役　員

第7条 本部会に左の役員をおく

一、部　長　一　名

二、副部長　三　名

三、委　員　若干名

四、常任委員　若干名

（内会計一名を兼ねる）

五、監　事　二　名

第8条 部長及副部長は委員の推せんにより全国高等学校体育連盟理事会の承認を得て会長之を委嘱する(=高体連規約第13条)

部長は本部会を代表し、会務を統轄する。

副部長は部長を補佐し、部長事故あるときはその職務を代行する。

第9条 委員は全国の都道府県高等学校体育連盟ハンドボール部会より1名以上選出する。委員はその組織団体を代表するものである。

第10条 常任委員は委員会において選出される。

部長及副部長は常任委員の資格をもつ。

第11条 監事は委員会において推せんし、部長之を委嘱する。

監事は会計を監査する。

第12条 役員の任期は2ヶ年とし重任を妨げない。

第13条 委員及常任委員の選出に関する細則は別に定める。

第6章 会　議

第14条 委員会は部長が招集し、予算、決算、事業、其他重要事項を審議決定する。

定例委員会は毎年全国高等学校選手権大会第一日並国民体育大会開会前日の2回とする。

第15条 常任委員会は委員の決議を執行すると共に、緊急事項で委員会を開く暇のない時は委員会を代行する。

第16条 会議は総員の3分の1以上の出席がなければ開くことが出来ない。ただし、委任状は認める。すべての会議は部長が議長となる。

第7章 会　計

第17条 本部会の経費は負担金、寄附金、事業収益其他の収入によってこれにあてる。

第18条 本部会の会計年度は毎年4月1日に始まり3月31日に終わる。

第19条 本部会の予算は委員の承認をうること。

第8章 附　則

第20条 本部会の会則は、委員会の決議によらなければ変更できない。

第21条 本部会の事業を達成する為には日本ハンドボール協会と密接な連絡をとる。

委員数並に常任委員数の協定

第1項 各都道府県から1名の委員を選出する。

第2項 部長・副部長出身都道府県は別に1名を加える。

第3項 東京都と大阪府に限り3名の委員を選出する。

第4項 常任委員はブロック別に左記の数を出すものとする。

北海道1、東北1、北陸1、関東3、東京2、信越1、東海2、近畿1、大阪3、中国1、四国1、北九州1、南九州1。

全日本実業団ハンドボール連盟規約

第1章 総　則

第1条（名称）本連盟は全日本実業団ハンドボール連盟という。

第2条（事務所）本連盟は事務所を東京都品川区五反田一の二六三、大崎電気工業株式会社内に置く。

第3条（組織）本連盟は東日本、中部、関西、中・四国、九州の各地域連盟で組織し、地域の範囲については理事会の承認によって決める。

第4条（目的と事業）本連盟は日本ハンドボール界の発展のために日本ハンドボール協会に協力し、実業団チームの育成を目的とする。さらに事業として毎年日本協会と共同主催で全日本実業団選手権大会を開催する。

第2章 役　員

第5条（役員）本連盟に次の役員を置く。

会　長　一　名

副会長　若干名

顧　問　若干名

参　与　若干名

理事長　一　名

副理事長　一　名

理　事（常務理事を含む）　若干名

監　事　二　名

第6条（会長、副会長）会長は本連盟を代表、統括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはその職務を代行する。会長は理事会で地域連盟の会長の中から推せんする。副会長は理事会でその他の地域連盟の会長の中から推せんする。

第7条（顧問、参与）顧問は本連盟の最高諮問機関とし、参与は

重要事項の諮問機関とする。顧問、参与は各連盟の推せんにより、理事会の承認を得て会長がこれを委嘱する。
第8条（理事長、副理事長）理事長、副理事長は会長の指名によって決め、理事長は会務全般を統括する。副理事長は理事長を補佐し、理事長事故あるときはその職務を代行する。
第9条（理事）理事は地域連盟から選出して理事会を組織し、本連盟の最高議決機関とする。ただし地域連盟が選出する理事（常務理事を含む）の人数は別に決める。なお常務理事は理事会の決定に従って各種常務を処理する。常務の内容およびその分担は別に決める。
第10条（監事）監事は会長の指名によって決め、本連盟の財務を監査する。
第11条（任期）各役員の任期は2年とし再任をさまたげない。ただし、補欠役員の任期は前任者の残任期間とする。
第12条（名誉職）役員はすべて名誉職とする。
第13条（有給職員）本連盟に有給の職員を置くことができる。職員の任免は会長が決める。

第3章　会　議

第14条（会議）本連盟の会議は理事会、常務理事会とする。
第15条（権限）理事会に付議される事項は次のとおり。
一、予算の審議
二、決算の承認
三、事業計画
四、規約の改廃
五、役員の承認または決定
六、その他の重要なる事項
第16条（理事会）本連盟の定例理事会は毎年全日本実業団ハンドボール選手権大会の前日に、会長が招集して開催する。会長が必要と認めたとき、または、理事の過半数以上の請求があったときは、会長はそのつど臨時理事会を招集できる。臨時理事会を招集する場合にかぎり文書をもって各理事に諮り、理事会の開催を省略することができる。
第17条（議事）理事会の成立は会長、副会長及び理事の過半数（委任状を含む）の出席を必要とする。議事は出席理事の過半数で決定する。ただし規約の改廃については構成員の三分の二以上の賛成を必要とする。会議の議長には会長が当る。
第18条（部外者の出席）会長が必要と認めた場合には、本連盟の役員でない部外者でも理事会、常務理事会に出席し、出席理事の承認を得て意見を述べることができる。
第19条（常務理事会）常務理事会は必要のつど、理事長が招集する。

第4章　経　費

第20条（経費）本連盟の経費は次のものを当てる。
一、各地域連盟の分担金（当分の間、徴収せず）
二、加盟チームの登録費
三、事業収益金
四、寄付金及び補助金
五、その他の収入
第21条（分担金、登録費）各地域連盟の分担金（当分の間、徴収せず）および加盟チームの登録費は理事会において決める。
第22条（予算、決算）本連盟の予算、決算は理事会の承認を必要とする。
第23条（保管）本連盟の資産は会長が保管する。
第24条（会計年度）本連盟の会計年度は毎年4月1日に始まり翌年3月31日で終わる。

第5章　補　則

第25条（細則）本規約の運営に必要なる事項の細部については、理事会の議決を経て別に細則を決めることができる。
第26条（地区別）第3条の地域連盟の範囲は次のとおりとする。
〔東日本〕北海道、青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島、茨城、群馬、東京、千葉、埼玉、神奈川、山梨、新潟
〔中部〕愛知、静岡、三重、岐阜、富山、石川、福井、長野
〔関西〕滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
〔中・四国〕岡山、広島、山口、徳島、島根、鳥取、香川、愛媛、高知
〔九州〕福岡、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島、佐賀
第27条（施行期日）本規約は昭和40年4月1日から効力を生ずる。

「愛知リーグ」の発足決まる

愛知協会では、今年度から懸案の「愛知リーグ」を行うことに決めた。

この大会は、県内大会で最も権威のあるタイトルをかけるもので第1回の今年は11月25日から5日間、名古屋の金山体育館で、愛知実業団連盟、愛知学生連盟、愛知クラブ連合の各パートから二チームづつの代表を選出して総当り戦を行う。県大会でこうした形式を採るのは全国で初めて。

愛知協会では、将来は近接する岐阜、三重、静岡など東海協会加盟組織に同ようの大会を開かせ、各県勝者による「東海リーグ」を行ない、さらに全国各ブロック協会に波及させて「日本リーグ」へと伸展するよう期待をかけている。

各地の記録（寄稿歓迎）

大崎電気が男女優勝

第2回関東実業団選手権は横浜市に男子12、女子3チームが参加3月9、10日に男子予選リーグ（横浜公園体育館）、23、24日に男女決勝リーグ（横浜文化体育館）という日程で行われた。

男子は、予選で全日本実業団3位の三景（東京）が日進商会（神奈川）に敗れる番狂せがあった。決勝ラウンドは予選を通った2チームと、前回の上位4チームを2組に分け、各組同位チームによって決勝以下が争われた。

その結果、全日本三冠王の大崎電気（埼玉）が練習不足で苦戦を強いられながらも要所を逃さぬ試合運びを見せて2連勝を飾った。2位はカムバックの態勢を整えた千代田印刷機製造（東京）。

女子は、各チームとも完調とはいえず内容の乏しい試合になったが、大崎電気（埼玉）が2連勝を狙う三菱鉛筆（神奈川）をおさえて初優勝した。

▼男子予選リーグA組

日進商会（神奈川） 37—17 大成プレハブ（神奈川）
三　景（東京） 41—8 セントラル自動車（神奈川）
大成プレハブ 26—22 セントラル自動車
日進商会 21—20 三　景
三　景 42—10 大成プレハブ
日進商会 32—5 セントラル自動車

【順位】①日進商会3戦全勝②三景③大成プレハブ④セントラル自動車

▽同B組

原子力研究所（茨城） 不戦勝 和同建設（神奈川）
日立製作所（茨城） 26—11 日本発条（神奈川）
日本発条 不戦勝 和同建設
日立製作所 42—22 和同建設
原子力研究所 32—14 日本発条
日立製作所 21—14 原子力研究所

【順位】①日立製作所3戦全勝②原子力研究所③日本発条④和同建設

▽同準決勝リーグA組

日進商会 20—15 日本鋼管（神奈川）
大崎電気（埼玉） 26—20 日進商会
大崎電気 28—26 日本鋼管

【順位】①大崎電気②日進商会③日本鋼管

▽同B組

千代田印刷機製造（東京） 22—15 日立製作所
自衛隊勝田（茨城） 25—11 日立製作所
千代田印刷機製造 26—19 自衛隊勝田

【順位】①千代田印刷機製造②自衛隊勝田③日立製作所

▽同5・6位決定戦

日本鋼管 22—21 日立製作所

▽同3・4位決定戦

自衛隊勝田 18（8—8, 6—6, …, 1—1, 3—1）16 日進商会

▽同決勝戦

大崎電気（埼玉） 21（10—3, 11—5）8 千代田印刷機製造

▽女子リーグ

大崎電気（埼玉） 14（6—2, 8—6）8 東京重機（東京）
三菱鉛筆（神奈川） 14（7—1, 7—4）5 東京重機
大崎電気 11（8—2, 3—0）2 三菱鉛筆

【順位】①大崎電気②三菱鉛筆③東京重機

四日市工、津女子勝つ

▼三重県高校室内（新人）選手権（1月・津市体育館）

▽男子準決勝

四日市工 22—9 海　星
高　田 不戦勝 四日市商

▽同決勝

四日市工 11（7—5, 4—3）8 高　田

▽女子準決勝

上野商 8—2 松阪女子
津女子 5—2 四日市

▽同決勝

津女子 6（3—1, 3—4）5 上野商

鹿町工、強味示す

▼第3回長崎県高校新人戦（2月）

▽男子準決勝

鹿町工 11—4 口　加
佐世保北 13—9 西　海

▽同決勝

鹿町工 11—7 佐世保北

▽女子準決勝

島原農 9—1 佐世保北
佐世保商 9—0 長崎北

▽同決勝

佐世保商 6—2 島原農

▼静岡県高校新人戦（2月）

▽男子・中部地区決勝

清水商 7—5 静岡農

▽同・西部地区決勝リーグ順位

①浜松南4戦全勝②気賀3勝1敗③天竜林業④二俣⑤春野

▽女子・中部地区決勝

静岡城北 7—6 清水商

▽同・西部地区決勝

二　俣 11—4 浜松南

三菱油化再び本田を破る

▼三重県一般室内選手権（1月・津市体育館）＝男子のみ

▽準々決勝

本田技研 36—9 県立三重大
鵜の森ク 19—17 大協石油
高田ク 22—12 鈴鹿工専
三菱油化 26—17 三重教員

▽準決勝

三菱油化 21—12 鵜の森ク
本田技研 32—10 高田ク

▽決勝

三菱油化 14（9—6, 5—6）12 本田技研

米山泉山梨協会長他界

米山泉山梨協会長・日本協会評議員は甲府市ですい臓がんのため亡くなられた。66才。

編集後記

43年度第1回の雑誌をお届けします。

ヨーロッパでは、空前の国際試合が行なわれ、各国が必死の強化策をとっていることが、遠い日本にいてもひしひしと感じられるです。ウカウカしていてはとりかえしがつきません。

日本女子ナショナルチームの合宿も行なわれました。編集部では特にお願いして、団長田村正衛氏に表紙の写真を撮影していただきました。氏は日本写真協会の役員もやっておられ、写真の腕も立派なものです。どうもありがとうございました。

長い間、機関誌の事務をやってもらっていた平林さんも、一月の鈴木さんの退職につづいて退職されました。長い間本当にありがとう。どうか幸多き人世を……（TS・F）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール　第五十二号
昭和四十年六月一日 第三種郵便物認可　昭和四十三年三月二十五日印刷　昭和四十三年四月一日発行
発行所　日本ハンドボール協会　東京都渋谷区神南町二五　電話 大代表(467)三一一一　振替東京五八三四八番
編集兼発行人　鈴木達雄
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）